The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	徳島・吉野川流域におけるアクセントの現在
Author(s)	真田, 信治; 武田, 佳子; 余, 健
Citation	阪大日本語研究. 2002, 14, p. 61-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8409
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』14（2002）

徳島・吉野川流域におけるアクセントの現在

Dynamics of Accent in the Yoshinogawa Basin

真田信治・武田佳子・余健
SANADA Shinji・TAKEDA Yoshiko・YEO Ken

キーワード：徳島市式アクセント、池田式アクセント、接触アクセント、アクセントの変化、アクセントの標準語化、情報処理論

【要旨】

徳島県の吉野川流域のアクセントは早くから注目され、これまでに種々の報告がなされている。本稿で対象とする吉野川流域の北岸地帯に関しては、先行研究によれば、徳島市を中心とする河口地域では関西との交流が深く、アクセントも京阪とほとんど同じである一方、上流域の池田町あたりは下流地域よりも山を越した香川県側との交流が深く、アクセントも讃岐式のものが行なわれており、中流域の脇町あたりにはこの２種類のアクセントが接触して、双方の特徴が交じり合っているという。

本稿では、それら先行研究を踏まえ、新たに調査したそれぞれの地点におけるアクセントを社会言語地理学的な観点から分析し、その現状と動向について報告する。

1.　はじめに

唐突ではあるが、筆者（真田）の私的な思い出から述べたい。

かつて大学院学生であった1971年のある日のことである。まだ大学紛争の燃え残りがくすぶっていたキャンパスを歩いていて、ある研究会の案内を目にしたときの衝撃は忘れられない。その発表の題目の副題に「ことばと社会の関連を求めて」とあったからである。

研究のタームに「地理」はあっても、「社会」というタームの存在しない時代であった。「社会」との関連などを探るのは言語学研究においてはタブーであると叩き込まれていた＜昔＞のことである。いずれにしても、この題目を見て、新しい時代の到来を予感したのであった。

当時仙台にいたので、その研究会には出席できず、そのことはずっと忘却していたのであるが、最近思うところがあって調べたところ、この研究会は「都立大学方言研究会第

117回研究会」(1971. 9. 4)で、発表者は、今は亡き加藤（善理）信昭氏の「徳島市における言語調査の一つの試み―ことばと社会の関連を求めて―」であった。

加藤氏であれば、当時すでに知っていた。1968年５月に行われた第６回日本方言研究会で「境界地帯におけるアクセントの問題―吉野川流域を中心として―」を発表した人である。この内容をめぐっては発表時に論争があった。そして、激論は懇親会にも持ち込まれていた。その一部始終をそばで見聞きした者としてはそのことが強く印象に残っている。ちなみに、この論争に割って入ったのが故徳川宗賢先生であった。論争の中身はしかし実はよく分からなかった。ただ、加藤氏が「どちらからどちらと言うわけではなく、接触は接触だ」と叫んでいたのを憶えている。

それ以来、この流域での実態を自分の目で確かめたいという気持を心に抱きつつ、長い時が経過してしまった。しかし、ようやくその機会がめぐってきた。1999年度の大阪大学大学院で真田の主宰する方言学演習（フィールドワーク）において、当該地域を対象とすることになったからである。

調査地点は、吉野川北岸を中心にした松茂町から池田町に至る18地点（図１参照）で、インフォーマントは各地点生え抜きの10～89歳の人々である（表１参照）。本調査は1999年７月に行った。調査員は、真田のほか、次の者である。

朝日祥之、阿部貴人、石田祐子、簡　月真、菅　玲見、岸江信介、金　智英、小泉涼子、柔慮セーザ、高木千恵、武田佳子、丁　恩淑、辻　加代子、時見隆一、長澤亜希子、永見昌紀、西尾純二、林　雅子、舩木礼子、余　健

図１　調査地点（小文字ゴシックが調査地点）

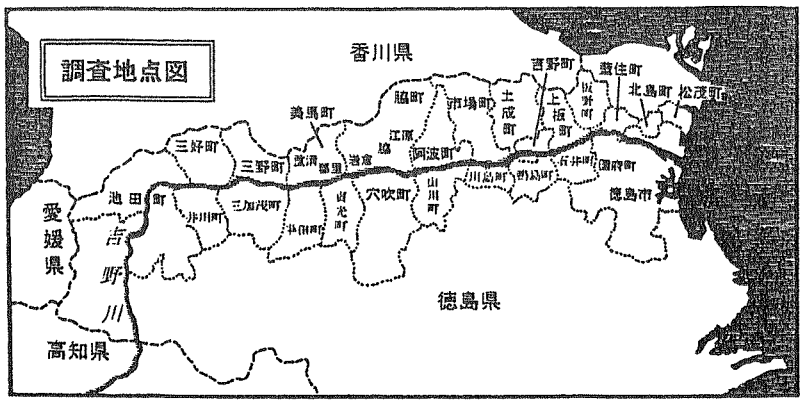


表１

	調査地	話者名	年齢	本人の言語形成地	母の言語形成地	父の言語形成地
1	松茂町	MTM	82	松茂町	川内町	松茂町
2	松茂町	NTM	47	松茂町	北島町	松茂町
3	松茂町	KBM	34	松茂町	鳴門市	松茂町
4	松茂町	TTM	19	松茂町	松茂町	鳴門市
5	国府町	KSF	81	国府町	国府町	国府町
6	国府町	ETF	62	国府町	国府町	国府町
7	国府町	TSF	55	石井町	上板町	石井町
8	国府町	AOF	43	国府町	国府町	石井町
9	国府町	NOF	48	国府町	阿波町	石井町
10	国府町	ATM	37	国府町	国府町	国府町
11	北島町	MSF	28	国府町	藍住町	川内町
12	北島町	YNM	87	北島町	北島町	北島町
13	北島町	EMF	65	北島町	神山町	神山町
14	北島町	ITM	57	北島町	北島町	北島町
15	北島町	SMM	40	北島町	応神町	北島町
16	藍住町	IIM	80	藍住町	鳴門市	藍住町
17	藍住町	KKM	55	藍住町	鳴門市	藍住町
18	藍住町	FIM	47	藍住町	貞光町	藍住町
19	藍住町	TIM	15	藍住町		
20	上板町	KTM	83	上板町	上板町	上板町
21	上板町	UTM	70	上板町	上板町	上板町
22	上板町	YSM	69	上板町	上板町	板野町
23	上板町	ITM	41	上板町	上板町	上板町
24	上板町	EIF	18	上板町	上板町	上板町
25	吉野町	FAF	68	吉野町	吉野町	吉野町
26	吉野町	YOM	65	吉野町	吉野町	吉野町
27	吉野町	MMF	23	吉野町	吉野町	吉野町
28	吉野町	YAM	48	吉野町	吉野町	吉野町
29	土成町	TIM	74	土成町	市場町	土成町
30	土成町	HNM	65	土成町	市場町	市場町
31	土成町	HMM	47	土成町	市場町	土成町
32	土成町	TYM	24	土成町	土成町	河内村
33	市場町	KBM	72	市場町	市場町	市場町
34	市場町	TOM	58	市場町	市場町	市場町
35	市場町	MIM	45	市場町		市場町
36	市場町	MMM	23	市場町	市場町	阿波町
37	阿波町	YBM	72	阿波町	阿波町	阿波町
38	阿波町	KNM	63	阿波町	阿波町	阿波町
39	阿波町	JNF	38	阿波町	阿波町	山川町
40	阿波町	EHF	23	阿波町	市場町	阿波町
41	穴吹町	TKM	78	穴吹町	穴吹町	穴吹町
42	穴吹町	KNM	62	穴吹町	穴吹町	穴吹町

	調査地	話者名	年齢	本人の言語形成地	母の言語形成地	父の言語形成地
43	穴吹町	MOF	49	穴吹町	東京	横浜
44	穴吹町	TIF	25	穴吹町	貞光町	穴吹町
45	脇町江原	SKM	89	脇町江原	脇町	脇町
46	脇町江原	KKM	61	脇町江原	阿波町	脇町脇
47	脇町江原	AKM	38	脇町江原	美馬町	脇町
48	脇町江原	YKF	10	脇町江原	脇町岩倉	脇町江原
49	脇町脇	YKM	78	脇町脇	河島町	池田町
50	脇町脇	EGF	70	脇町脇	脇町江原	脇町脇
51	脇町脇	MKF	41	脇町脇	脇町脇	脇町脇
52	脇町脇	MKM	15	脇町脇	脇町脇	脇町脇
53	脇町岩倉	MNM	79	脇町岩倉	脇町岩倉	脇町岩倉
54	脇町岩倉	INM	62	脇町岩倉	脇町岩倉	脇町岩倉
55	脇町岩倉	TNF	57	脇町岩倉	脇町岩倉	
56	脇町岩倉	MSM	26	脇町岩倉	脇町	脇町
57	美馬町郡里	KUF	74	美馬町郡里	三野町	美馬町郡里
58	美馬町郡里	STF	43	美馬町郡里	美馬町	美馬町
59	美馬町郡里	SKF	23	美馬町郡里	美馬町郡里	徳島市
60	美馬町郡里	SAM	70	美馬町重清		美馬町重清
61	美馬町重清	CMF	60	美馬町重清	美馬町	美馬町
62	美馬町重清	SKM	60	美馬町重清	美馬町重清	美馬町重清
63	美馬町重清	KSM	43	美馬町重清	美馬町	美馬町
64	美馬町重清	YFM	21	美馬町重清	美馬町重清	貞光町
65	三野町	ICM	64	三野町	三野町	三野町
66	三野町	MOF	48	三野町	中国	三野町
67	三野町	SHM	43	三野町	三野町	三野町
68	三野町	HOM	26	三野町	井川町	三野町
69	三好町	YOM	80	三好町	三加茂町	三好町
70	三好町	SMF	62	三好町	三好町	三好町
71	三好町	MSM	37	三好町	三好町	三好町
72	三好町	KMF	23	三好町	三野町	三好町
73	池田町	SNM	80	池田町	池田町	池田町
74	池田町	MNF	58	池田町	池田町	池田町
75	池田町	TTM	31	池田町	池田町	池田町
76	池田町	NKM	24	池田町	池田町	山城町

(注)話者名は、イニシャルと性別(MorF)で表されている。

本稿では、一本の論文としての構成については統一を図ったが、執筆者の個性・創意を尊重して、各章の内容についてはそれぞれの執筆者の裁量にゆだねることとした。なお、データの展示は、武田によって新しく開発されたグロットグラム（地理×年齢図）作成の専用マクロ（Excel）を用いて行った。

（以上執筆：真田）

2. アクセントの変化

1. 先行研究

1. 1 吉野川流域におけるアクセント区分

吉野川流域におけるアクセントが、徳島市を中心とする地域と、池田町を中心とする地域で異なることは以前から指摘されている。石田・岸江（2001）では徳島市域を含む県東部のアクセントを中央式アクセントの下位分類として「徳島市式アクセント」、美馬・三好郡平野部にみられるものを、讃岐式アクセントの一つである「池田式アクセント」と呼んでいる。上野（1997）では方言区域として県東部地域を＜下郡＞、県西地域を＜上郡＞と呼んでいるが、これら二つのアクセントの境界線は、阿波郡阿波町と麻植郡山川町の間にある徳島本線川田トンネル付近にあるという。これは今回の調査地域の、阿波町と穴吹町の境界線にほぼ一致する。

この二地域のアクセントの違いとしてあげられる代表的な項目が２拍名詞第３類である。県東部地域では京阪と同じく、第３類は第２類に合流しHLであるのに対し、県西部では讃岐式アクセントが使われており第３類は第１類に合流してHHであるとされている。県西部におけるHHについては、アクセント体系として、同じ高さではなく緩やかな下降を伴う「下降調」であるという佐藤（1996）などの見解もある一方で、それを否定する山口（2001）の意見もあり、石田・岸江（2001）では、HHアクセントを、自然下降との区別や県西部のみに見られるものであるのかということを即断できないとして「非上昇式」と位置付け、徳島市アクセントも一括して、吉野川流域のアクセントには「非上昇式と上昇式の対立」があるとしている。

1. 2 徳島市における３拍動詞のアクセント変化

上野・仙波（1993）によれば、３拍動詞第２類のアクセントは近世中期頃HLLであったものが、現代京阪では五段活用動詞はHHHに、一段活用動詞はLLHに変化しているが、徳島市周辺はこの変化が進行中で、現在も変化の渦中にあるという。1991年から1992年にかけて、徳島市生え抜きの人を対象に行った読上げ調査では、五段活用動詞において、変化前のHLLと変化後のHHHの使用割合が逆転するのは30代前後であり、一段活用動詞においては変化前のHLLと変化後のLLHの使用割合が逆転するのは50代～60代であるという結果が出ている。そのことから、五段活用の動詞では一段活用の動詞より変化の速度は20年から30年変化遅いが、調査対象の10代の若者たちが70代を迎える頃には変化は完了するであろうと

し、また推定としながらも、変化の始まりは百年から百数十年前に遡れるであろうとしている。

また森（1958）では、<「生きる」類>と分類している３拍動詞第２類一段活用動詞について、徳島市および三好郡の東祖谷山から池田町にかけての地域ではLLHが使われており、鳴門・富岡（阿南市）ではHLLからLLHへの過渡期であるとしている。そして、過渡期にある地域ではLLHを多用する傾向は臨海地域と20歳以下の世代に顕著であるとし、徳島市では若い世代にHLLからLLHの変化が終り、鳴門市・小松島市・富岡などでは中学・高校生がLLHを多用する、としている。森が調査した1950年代半ばから後半の20歳前後の世代は上野・仙波調査の時期には50代から60代になっており、三十余年を経た二つの調査は、徳島市における３拍名詞第２類一段活用動詞の変化について、同じ結果を報告しているといえる。

2.　調査結果と考察

2．1　調査データの処理方法について

2．1．1　調査データ

今回の調査で読上げに使用したデータは、大別すると次の３種類に分けられる。

a．文と単語の読上げ

文は１拍から４拍の名詞と、２拍から５拍の動詞または形容詞を組み合わせたもので、動詞文が92、形容詞文が14の計106文である。２拍名詞第３類は27語を含めたが、その他の名詞は一つの類から４～６語ずつを使用した。動詞は２拍語31、３拍語53、４拍語７、５拍語１で、形容詞は２拍語１、３拍語８、４拍語３、５拍語２である。読上げ順序は「窓をあける。窓。」というように、文・名詞とした。また、文はできるだけ日常に使うようなものになるよう心がけた。

b．動詞の終止形と活用形の読上げ

終止形については、２拍動詞12語（第１類と第２類の五段活用語と一段活用語それぞれ３語ずつ）と３拍動詞19語（第１類は五段活用語と一段活用語３語ずつ、第２類はそれぞれ５語ずつ、第３類は五段活用語３語）を使用した。活用形は、２拍動詞第１類と３拍動詞第２類の五段活用語と一段活用語からそれぞれ２語ずつ計８語を使用した。

c．２回目の文と単語および動詞の終止形の読上げ

上記ａの２拍名詞第３類の27語とそれを含む27文、および２拍動詞第１類６語（五段活用語３、一段活用語３）と３拍動詞第２類10語（五段活用語５、一段活用語５）

をランダムに並べた。

2．1．2　聞取りおよび分類の方針について

今回の調査地域においては、「下降調」が存在するかどうかという議論があることからもわかるように、聞き取れる微妙な音調を音韻的なものとみなすかどうかという問題があり、またそれとは別に、1語の中で段階的な上昇や下降が聞えるものもあって、いわゆる高低二段観では表しきれない音調が使用されているように思えた。しかし、それらをすべて別項目としてたてることは実質的に困難であると同時に、細分化することは全体を俯瞰する上で必ずしも適切ではないと考え、聞き取りに際しては京阪式アクセントの規則をもとに、次のことを基準として、高低二段観に準拠した分類を行った。

◆　聞き取りにおいて、基本的には、拍により高さが違って聞えれば、その幅の大小に関わらず、その拍で上昇または下降が生じているとみなした。

◆　文の読上げにおいて、助詞または動詞・形容詞の最後の拍が主部・述部それぞれの中で2つ目の山になっている場合は、助詞または文末を卓立させるイントネーションが使われているとみなし、アクセントとはみなさなかった。

◆　単語の読上げにおいても、語末が2つ目の山になっている場合は、語末を卓立させるイントネーションとみなし、アクセントとはみなさなかった。

◆　1語中に3種類以上の高さが使われていると判断した場合は、状況に応じて次のいずれかの分類を行った。

①　文の聞き取りで、名詞が低く始まり段階的に高くなっていき、助詞がもっとも高い場合、その名詞は低起無核語であるとみなした。また、その場合の助詞の高さと動詞の1拍目の高さを比べ、動詞の1拍目が助詞よりも高ければ後接する動詞は高起語、低ければ低起語であるとみなした。

②　名詞・動詞が高く始まり比較的均等に段階的に低くなる場合は1拍目と2拍目の高さが異なることに注目し、頭高型（高起有核）とみなした。

③　名詞・動詞で、1語内において、上昇や下降が複数回繰り返された場合は、もっとも大きく高さが変化したところのみを高低の変化とみなした。

2．2　名詞についての結果と考察

2．2．1　2拍名詞第3類の語について

（1）概要

今回調査対象としたのは27語であるが、穴吹町から池田町までの地域におけるアクセン

トは、語により、徳島市域と同じHLが使われているものと池田町を中心とする地域のHHが使われているものがはっきりしている。表２－１は穴吹町から池田町の地域について、調査語を、文の読上げと名詞単独の読上げにおけるHL使用数でグループ化し、一覧にまとめたものである。この地域のインフォーマント数は36名であるが、もっともHL使用者が少なかったのは文の読上げにおける「犬」と「土」で、それぞれHLを使用したのは１名のみであった。文の読上げ、名詞単独ともHL使用者数が０という語はなかった。ほとんどのインフォーマントにおいて、これらの語は、HHでなければHLという二者択一的なゆれがみられる。

表２－１

文中	HL使用者数	1－3	4－8	11－13	25－32
	調査語	犬・土／色・山・炭・家・坂・年・足／蚤・塩・耳・竿・糠・髪	岸・腕／垢／肝／鍵／綿	熊／鬼／網	月／花［31］／波
名詞単独	HL使用者数	2－3	4－9	11－13	25・32
	調査語	犬・色／山	土・炭・家・蚤・塩／坂・耳・竿・岸／糠・年／髪・腕／足・鍵／垢・肝	熊／鬼・網／綿	月／花・波

（表中の／は、使用数の区切りを表す）

表２－２

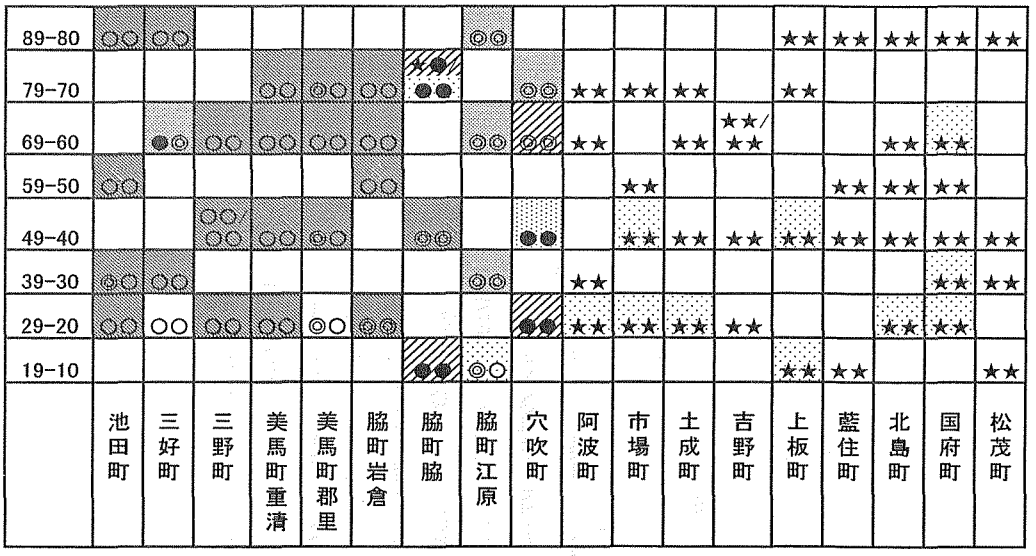
HLの使用	文中＝単独	文中＜単独					文中＞単独
差の語数	0	1	2	3	4	5	1
該当人数	14	9	2	3	1	3	4

文の読上げの名詞部分におけるHLの使用数と、名詞単独での読上げにおけるHLの使用数を比較すると、語ごとに見た場合、名詞単独の読上げに、HLがより多く使われる傾向がみえる。表２－２はインフォーマントごとに、文中と名詞単独での読み上げにおけるHL使用数の差をまとめたものであるが、こちらの表でも、個人差はあるが、名詞単独の読み上げでHLが多く使用される傾向が見られる。森（1958）の中で、３拍動詞について、実際の発音ではLLHなのに反省型ではHHHとする人が多い地域の解釈として、HHHからLLHへの変化が考えられるとしている。これは、変化途上にある場合、文という単位で前接語や後接語を伴っていて、前後の語とのつながりの中で単語に対する意識も比較的希薄になると思われる状態では従来の形が出現するが、単語を強く意識し、なおかつ他の語とのつながりによる制約を受けない場合には新しいアクセント型を認識する、という解釈であると考えられ

る。この森の考え方を援用すると、文の読上げは実際の使用、単語単独の読上げは反省型に該当し、HHは従来のアクセント型、HLは新しいアクセント型であるということになる。つまり、穴吹町～池田町の地域において、２拍名詞第３類の語はHHアクセントからHLアクセントへの変化の途上にあり、現在HHが使われている語も今後徐々にHLへ変化していく可能性を示しているものと考えられる。

次の図２は、調査対象27語について、文の読上げと名詞単独の読上げにおけるインフォーマントごとのHLとHHの使用数をグロットグラム上に表したものである。このグロットグラムからは、現在の状況として、２拍名詞第３類の語は松茂町～阿波町では全世代でHLが安定して使われていること、多少の個人差はあるものの、岩倉以西の地域においても全世代で概ねHHが安定して使われていること、穴吹・脇町江原・脇町脇では、中高年では主にHHが、若年層ではどちらかといえばHLが多く使用されていることがわかる。

図２　２拍名詞第３類の語のアクセント



HHの数

- 文中・名詞単独　ともに20以上
- 文中　20以上・名詞単独　10－19
- 文中・名詞単独　ともに 10－19
- 文中・名詞単独　ともに 5－9
- 文中・名詞単独　どちらか あるいは両方で 4未満の使用あり
- 文中・名詞単独　ともに 0

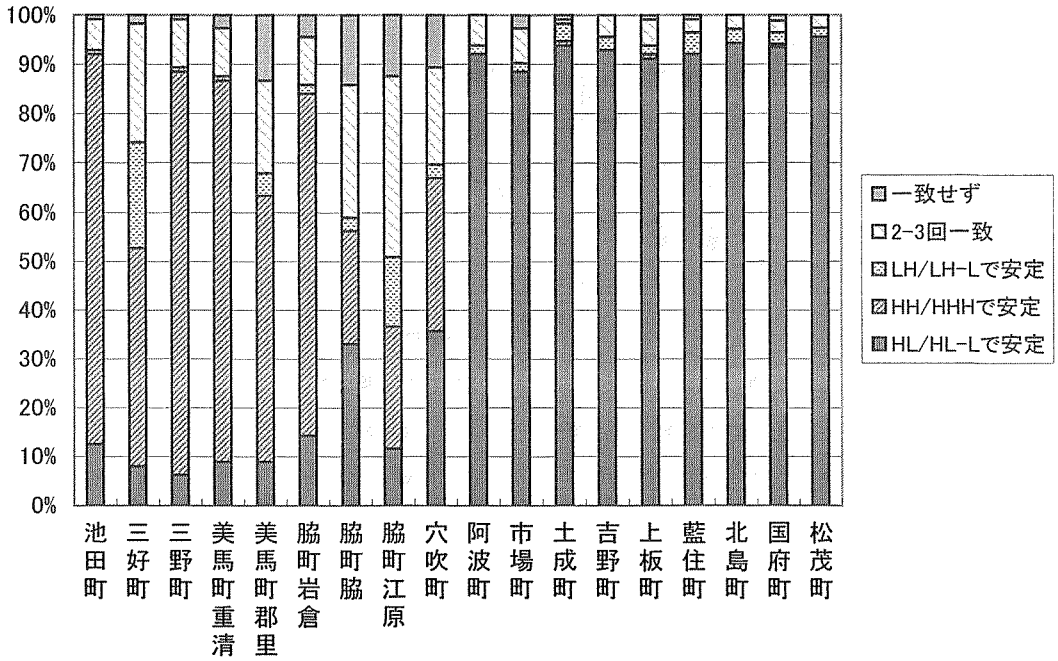
HLの数

左：名詞単独の読上げ	右：文の名詞部分
★ 25－28	★ 25－28
● 13－24	● 13－24
◎ 5－9	◎ 5－8
○ 1－4	○ 1－4

（２）地域別にみたゆれ

今回の調査では、２拍名詞第３類の語について、文と単語のみをそれぞれ２回ずつ合計４回読上げてもらっている。その４回の読上げにおけるゆれの有無と、ゆれがない場合に使用されているアクセント型に注目し、27語について４回のアクセントを比較した結果を、一致したものについてはアクセントの型別に集計し、地域単位にまとめたのが次の図３である。このグラフから、松茂町から阿波町までの地域においては、HL/HL-Lでほとんどゆれのないことがわかる。また、岩倉以西の地域についても、HL/HL-Lが10％前後、HH/HH-Hが70～80％で安定している。その中で、美馬町郡里、三好町の一致率が低く、またLH/LH-Lが多いのは、両地域とも若年層のインフォーマントが、標準語的なアクセントを指向していて、方言的なアクセントが出そうになると言い直すという状況であったためである。テープを聞くと、二人とも他の調査項目で調査員と話すときは方言を多用していたので、いわゆる読上げ口調に徹していたものと思われる。また、今回の調査では、文法項目として名詞文の指定辞や形容動詞活用語尾、接続表現において現れる「ダ／ジャ／ヤ」の使用について調査しているが、二人ともほぼ全項目について方言形を答えている。これらのことを考え合わせると、この二名については、標準語化が進んでいると見るよりは、方言に加えてもう一つのアクセント体系を持っていると見るべきであろう。

図３　２拍３類名詞のゆれ



穴吹町・脇町江原・脇町脇の３地域を見ると、他の地域に比べて４回の読上げの一致率が目立って低く「一致せず」の割合も高い。また、一致しているものについても、HL/HL-LとHH/HH-Hの割合にそれほど大きな差のないことがこの地域の特徴としてあげられる。このことから、脇町周辺は、２拍名詞第３類の語に県東部のアクセントを使うのか、県西部のアクセントを使うのかというレベルの揺れと同時に、個人の中でも、語のアクセントが必ずしも安定しているとは限らないというレベルのゆれがあることがわかる。数字を見た場合、脇町江原にその傾向が一層顕著に出ているが、これは、三好町、美馬町郡里と同じく、若年層のインフォーマントのアクセントが不安定であった上に標準語的なアクセントを多用していたことが影響しているためである。しかし、この脇町江原のインフォーマントは三好町・美馬町郡里の二人とは違い、コードを切り替えているという感じはない。また、文法項目の調査でも一部の項目（接続表現）で方言形を回答している以外はすべて標準語形を答えている。この「一部分に強く方言を残しているが、大部分は標準語的である」という現象は、アクセントの結果とまったく同じである。これらのことを考え合わせると、この調査結果は、調査時10歳という年齢からして、まだ本人のアクセント体系が確立していないことに起因するのかもしれないが、この地域において、平成生まれの世代では東京化が進んでいる可能性も否定できない。

2．2．2　２拍名詞第４類の語について

２拍名詞第４類の語は、関西、特に京阪神地域においては若年層における有核化が著しく、30代以下の世代では、ほとんどの語がLH-LもしくはHL-Lに変化している。今回の調査では、２拍名詞第４類については７語を、文の読上げとして１回読んでもらっている。その結果を、松茂町から阿波町までの地域と、穴吹町から池田町までの地域に分けて集計したものが次の表３である。低起無核語は後接する動詞の式により助詞の高さが変わるが（LL-LとLL-H）集計上は区別していない。全地域を通じて、いくつかの型が使われ、格段にゆれの目立ったのが「父」と「粟」であるが、これらは関西でもゆれの見られる語である。『大阪・東京アクセント音声辞典』（杉藤1995）には、大阪市生え抜きの６名（高年層３名と若年層３名）のアクセントが示されているが、それによれば、「粟」は高年齢者はLH/LL-Hが３名、LD/LH-Lが１名、若年齢者はHL/HL-Lが２名、LH/LH-Lが１名である。「粟」の場合は粟そのものが日常生活から消えつつあることに加え「泡」や地名の「阿波」など、「粟」より使用頻度が高いと考えられる同音異義語の影響が考えられる。秋永（1991）では、馴染み度の低いものは、伝統アクセントを継承することなく類推アクセントで発音されるようになることが指摘されているが、この「粟」もそれに該当する例であ

ろう。一方、「父」のアクセントは、高年齢者は３名ともLH/LL-H、若年齢者はHL/HL-Lが２名、LD/LH-Lが１名である。同じ４類の語で同じ音の「乳」を見てみると、高年齢者３名と若年齢者１名の４名がLH/LL-H、他の２名の若年齢者はそれぞれLH/LH-L・LD/LH-Lで、名詞単独では全員が「低高」のアクセント型を使っている。このことから、「チチ」をLHで言うとまず「乳」を連想するため、それを避けようと意識的に「乳」と異なるアクセントを使おうとしていることが考えられるが、「父」という語彙自体がもつ「外」の会話において使われる性質と、東京方言がHLアクセントであることも無視できない要因であると思われる。

表３

	池田町～穴吹町				阿波町～松茂町		
	LL-L(H)	HL-L	LH-L	他	LL-L(H)	HL-L	LH-L
海が（見える）	1	6	28	1	20	1	18
息を（する）	29	3	1	3	38	0	1
針を（さがす）	25	6	2	2	35	0	2
船を（作る）	30	3	0	3	37	0	2
父が（負ける）	16	14	5	0	24	13	2
栗を（食べる）	19	7	1	9	25	10	4
空が（見える）	23	4	8	1	32	1	6

またこの表で目につくのは、「海が」が、穴吹町から池田町の地域でまるで５類の語のような数値を示していることである。他の４類の語は伝統的なアクセントが使われているので、関西地域に見られるような、類としてのアクセント型の変化ではなく、「海」という語の個別の特性によるものであると考えられる。次に「海が見える」のグロットグラムを示す。

グロットグラムでは、松茂町から土成町にかけての若年層と市場町・阿波町の若年層から高年層にかけて、それに穴吹町から池田町の全世代にLH-L-LLHというアクセントが見られる。しかしこれは、結果的に同じアクセントが使われているだけで、そのアクセントが使われるようになった経緯は同じではないと見るべきであろう。「空が」でもLH-Lを使用している、「海が」「空が」以外にもLH-Lを使用している、というように条件をつけると、該当するのは10代と20代の３人になる。これらの人については、関西の影響、もしくは関西の若年層と同じ理由によるアクセント変化と見なせるのではないだろうか。もし関西の

図４　「海が見える」のアクセント

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-80	○▽	○▽						○▽						●▼	●▼	●▼	●▼	●▼
79-70				○▽	○▽	○▽	○▽/○▽		○▽	○＊	○▼	○▼		●▼				
69-60		○▽	○▽	○▽	○▽	○▽		●▽	○▽	○▽		○＊	○▼/●▼			●▼	●▼	
59-50	○＊					○▽					○▽				●▼	●▽	●▼	
49-40			○＊/○▽	○▽	○▽		○▽		○▽		○▽	○▼	○▽	●▽	●▼	●▼	●▽	●▼
39-30	○▽	○▽						＜▽		○▽							●▽	＜▽
29-20	○▽	＜＊	○▽	＝＊	＜＊	○▽			＜▼	○▽	○▽	○▽	●▽			○▽	●▽	
19-10							＜▽	＜▽						○▽	○▽			○▽

「海が」
- ● LL-H/LL-L
- ○ LH-L
- ＜ HL-L
- ＝ HH-H

「見える」
- ▼ HLL
- ▽ LLH
- ＊ LHL

「空が」にLH-Lを使用

「海が」「空が」以外にもLH-Lを使用

影響であるとすれば、３名のうちの一人が、今回の調査範囲では関西から一番遠い距離にある池田町の若年層であるということは、現代における外的接触の変化は物理的な距離とそれほど関係しないということを示していて興味深い。

2．2．3　１拍名詞第１類の語について

森（1958）によれば、１拍名詞第１類の語は、語単独で発音した場合は、徳島市などほとんどの地域では普通２拍にのばすが、美馬郡・三好郡ではのばさずに１拍で発音するのが一般的であり、助詞がついた場合は、徳島市などではH-Hとなり、美馬郡・三好郡ではH-Lとなるという。しかし、語彙によって分布状況は多少異なり、「気」は池田町でも助詞がつくとH-Hになるとのことである。次の表４は今回調査した１拍名詞第１類の語のアクセントを、池田町～穴吹町、阿波町～松茂町に分けて集計したものである。

表４

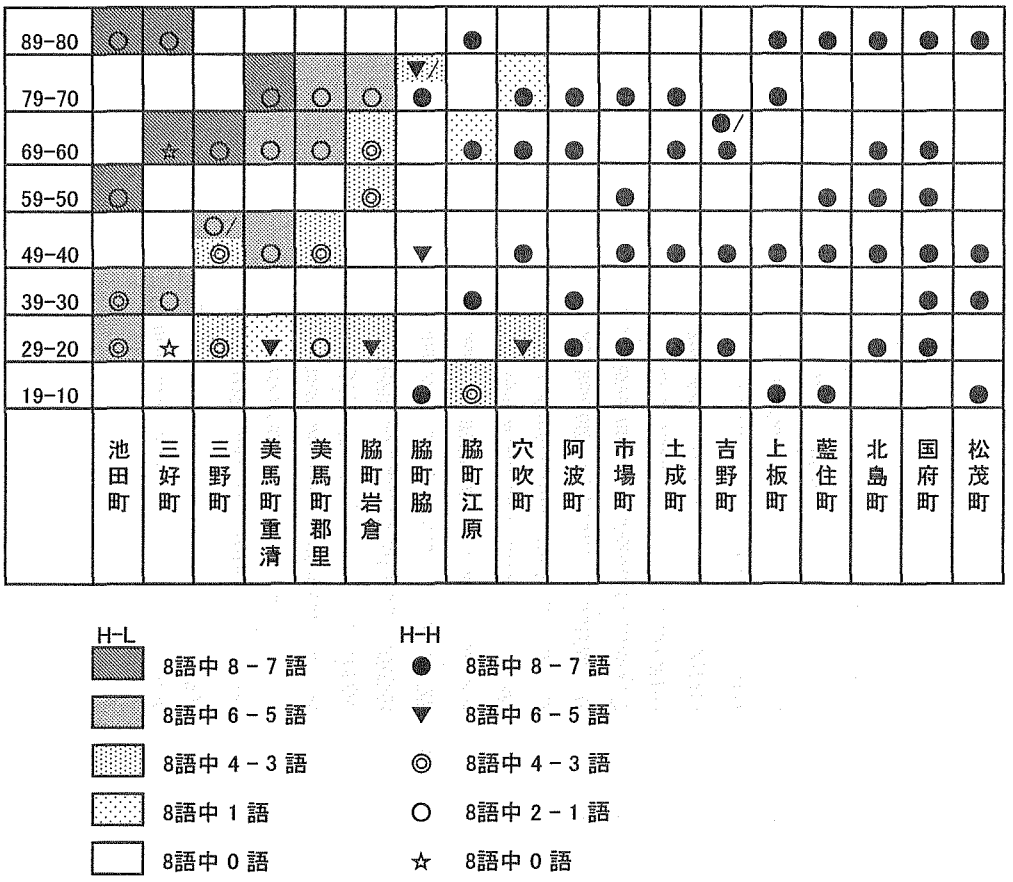
	池田町～穴吹町				阿波町～松茂町		
	H-L	H-H	L-L	L-H	H-L	H-H	L-L
気が（長い）	2	32	1	1	1	38	0
身を（守る）	8	26	0	1	0	38	0
実が（なる）	17	18	0	1	1	38	0
蚊が（飛ぶ）	17	17	0	2	0	39	0
柄が（短い）	17	12	5	1	0	36	3
血が（出る）	23	11	0	2	0	39	0
子が（泣く）	23	11	0	2	0	39	0
戸を（開ける）	26	8	0	1	1	38	0

松茂町～阿波町の県東部地域ではH-H以外のアクセントは例外的といえるほどH-Hで安定しているのに対し、穴吹町～池田町の地域では、語による差が目立つが、全体的にはH-LとH-Hが拮抗して使われている。この、H-HアクセントとH-Lアクセントの分布をグロットグラムで表したのが次の図５である。

図５では、脇町岩倉から池田町までの地域において、右上と左下を結んでH-Lアクセントの使用数を区切る線が見られる。つまり、徳島市に近いほど、そして年齢が若いほどH-Lアクセントの使用数が少なくなると同時にH-Hアクセントの使用が増えていることになる。また、森調査の行われた1950年代に例外的にH-Hアクセントが使われていた「気が」は今日でも圧倒的にH-Hアクセントが使われており、「身を」では36人中26人（72%）で、「実が」「蚊が」などでも半数でH-Hアクセントが使われている。これらのことは、池田町から脇町岩倉の県西部地域において、森調査以前からH-H化が始まっていて、その最先端にある語が「気」であり、現在もその変化が進行中であることを示していると考えられる。このような、何十年もかけて徐々に進行する変化においては、年齢と同時に変化の原因となる接触がある地域からの距離も大きな要因であることがうかがえる。

また、松茂町から市場町の60代以上のインフォーマント13名中12名が、「柄」を単独で読上げたとき、半母音を伴い/je/と発音している。文中になると、ほとんどの人は半母音なしの/e/になる。中には「エ」が全般的に/je/になる傾向の人も１、２名見られ、また、40代、50代でも、老年層の人ほどはっきりはしないが、語単独の場合には/je/と言う人が何人かいた。/je/を使用する人の年齢と地域が固まっていること、使用が見られる端の地域（市場町）は特徴が薄れていること、はっきり特徴の見られる地域ではすぐ下の世代に

図５　１拍名詞第１類の語のアクセント



も同じ傾向が見られることなどから考え、当該地域ではかつて「柄」は/je/と発音していた時期があるのではないだろうか。

2．3　動詞について

2．3．1　３拍動詞第１類の語について

今回調査した３拍動詞第１類の語は異なりで20語、のべで22語ある。図６のグラフは、その22語で使われているアクセントを語ごとに集計したものである。総数が語により異なっているのは、読み違いなどの無効データがあったことによる。図６からは、「曲げる」「拾う」「登る」以外の語はHHHで落ち着いていることがわかる。他の語とは明らかに違う様相を見せる３語のうち、「曲げる」については、先行研究でも例外的な語彙とされている。森（1958）では、池田・徳島市ではHHH、脇、岩倉、重清ではLHL、その他の地域

ではHLLが使われるとあり、小野（1998）には脇町ではLLHで落ち着いているとある。しかし今回の調査結果では、森（1958）の調査対象であったと思われる現在の老年層ではHHHは市場町と北島町の２名だけで、松茂町から阿波町までの地域では老年層がHLLで高年層から若年層はLLH、穴吹町から池田町までは全世代でLLHが使われる。

図６　３拍動詞第１類の語のアクセント

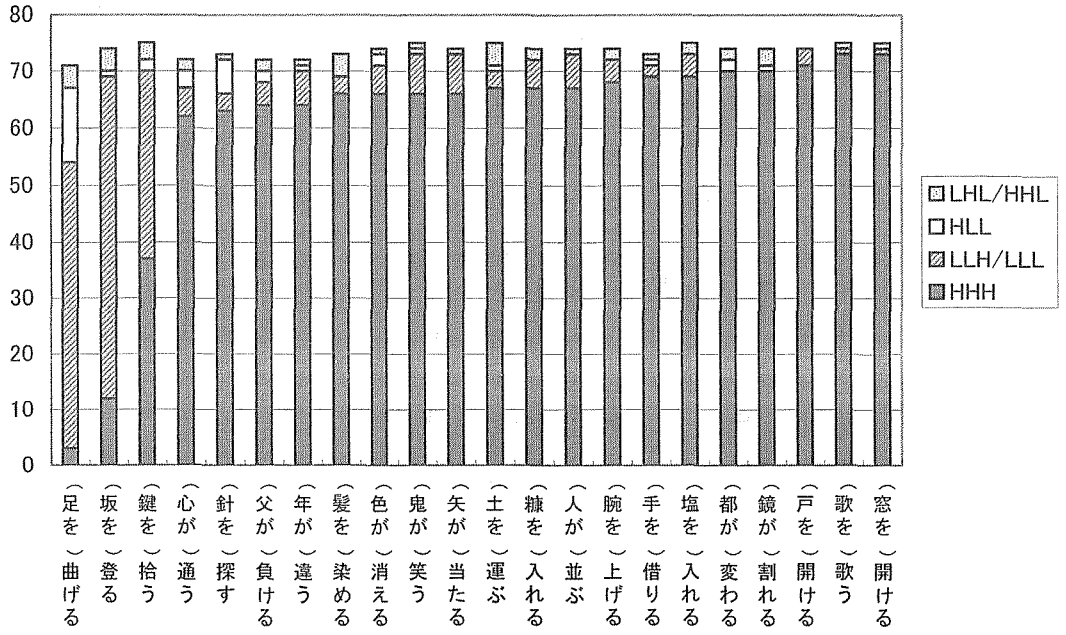
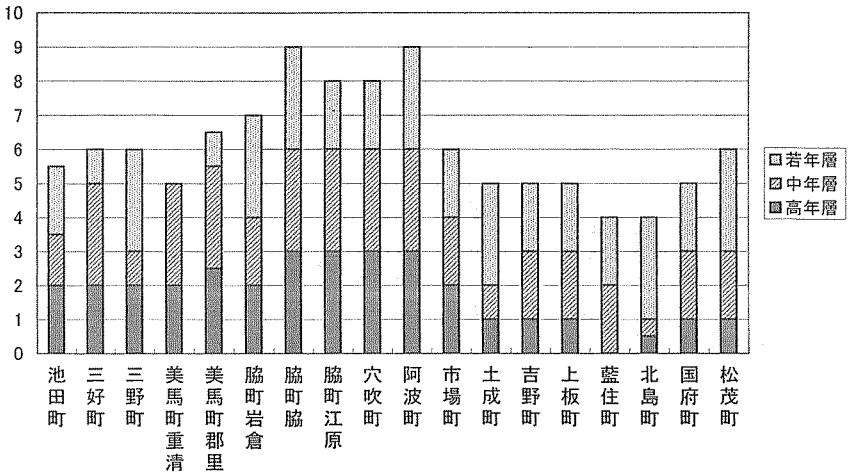


図７は、「曲げる」「登る」「拾う」のLLHアクセントの世代別使用数を合計して地区ごとにグラフにしたもので、各世代のインフォーマントがこの３語中の何語にLLHを使用したかを示している。便宜上80代～60代を老年層、50代～30代を中年層、20代～10代を若年層とし、一つの世代に複数のインフォーマントがいる場合はその使用数を平均している。インフォーマントの個人的な傾向についての考慮も必要であるが、概して若年層にLLHアクセントの使用者が多く、中高年層のLLHアクセント使用者が多い阿波町から脇町脇は地域としての使用数も多くなっている。脇町で「曲げる」がLLHで安定しているというのは、小野（1998）の調査結果と一致するが、「拾う」「登る」は小野の調査ではHHHで安定しているとされている語である。しかし小野調査は、実施されたのは1997年であるが、一人のインフォーマントのデータをまとめたものであるため、必ずしも脇町の傾向を反映しているとは限らない面をもつ。「曲げる」「拾う」「登る」でこのような結果が出た理由については、①今回の調査文（「足を曲げる」「鍵を拾う」「坂を登る」）に起因する偶然の理由に

よる②語自体に何らかの理由がある③新しい変化の萌芽である、などが考えられるものの、今回の調査結果からだけではいずれとも判別はできない。「曲げる」については、森（1957）でも同様の結果が出ているので、語独自の特殊性があるのかもしれない。

図７　「曲げる・登る・拾う」世代別LLH使用数



2．3．2　３拍動詞の変化とゆれ

（１）第２類の語の変化について

徳島市域で変化中であるという３拍動詞第２類の語について、今回の調査地域におけるアクセントの使用状況を、五段と一段の活用別にまとめたのが図８と図９のグロットグラムである。上野・仙波（1993）によれば、徳島市内においては、一段活用動詞は50代で、五段活用動詞は30代前後で、変化後のLLHや HHHの使用率が変化前のHLLを超えるという。森（1958）には、一段動詞の変化について、徳島市では若い世代でHLLからLLHの変化が終了し、鳴門市、小松島市から海部郡にかけての地域の中学・高校生がLLHを多用する、とある。上野・仙波と森の調査の時間差を考えると、徳島市内の変化については一致する結果である。1991年から1992年にかけて行われた上野・仙波の調査をもとに時間経過を加味すると、今回の調査のインフォーマントでは、一段活用動詞については60代、五段活用動詞は30代後半が同様の変化が見られる世代ということになり、グロットグラムでも、徳島市内に位置する国府町ではまさにその変化が現れている。森の調査にある1958年当時の中学・高校生の世代は、今回の調査では50代に該当するが、国府町以外の県東部の地域では、概してもう少し下の世代までHLL型のアクセントが使われているのがわかる。鳴門市、小松島市、海部郡のある県南東部は今回の調査地域ではないが、先行研究で関西の影響が強

図８　３拍動詞２類五段活用語のアクセント

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-80	◆	◆						◆						◇	◇	◇	◇	◇
79-70				◆	◆	◆	◎/◆		◆	◎	◆	◇		◇				
69-60		◇	◆	◆	◆	◆		◆	◆	◆		◇	◇/◇			◇	◇	
59-50	◆					◆					◆				◇	◇	◇	
49-40			◆/◆	◆	◆		◆		◆		◆	◇	◎	◇	◇	◇	◇	◇
39-30	◆	◆						◆		◆							◇	◆
29-20	◎	◇	◆	◆	∞	◆			◆	◆	◆	◆	◆			◆	◆	
19-10							◆	◇						◆	◆			◆

HLL使用率　60%より大　40%～60%　40%未満　0%

HHH使用率　◆ 60%より大　◎ 40%～60%　◇ 40%未満　∞ 0

図９　３拍動詞２類一段活用語のアクセント

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-80	◆	◆						◆						∞	◇	∞	∞	∞
79-70				◆	◎	◆	◆/◆		◆	∞	∞	∞		∞				
69-60		◆	◎	◆	◆	◆		◆	◆	◆		∞	∞/∞			◇	◎	
59-50	◆					◆					◇				◎	◆	◇	
49-40			◎/◆	◆	◆		◆		◆		◎	∞	◇	◆	∞	∞	◆	∞
39-30	◎	◆						◆		◆							◆	◇
29-20	◆	∞	◆	∞	∞	◆			◆	◆	◆	◆	◆			◆	◆	
19-10							◆	◇						◆	◆			◆

HLL使用率　60%より大　40%～60%　40%未満　0

LLH使用率　◆ 60%より大　◎ 40%～60%　◇ 40%未満　∞ 0

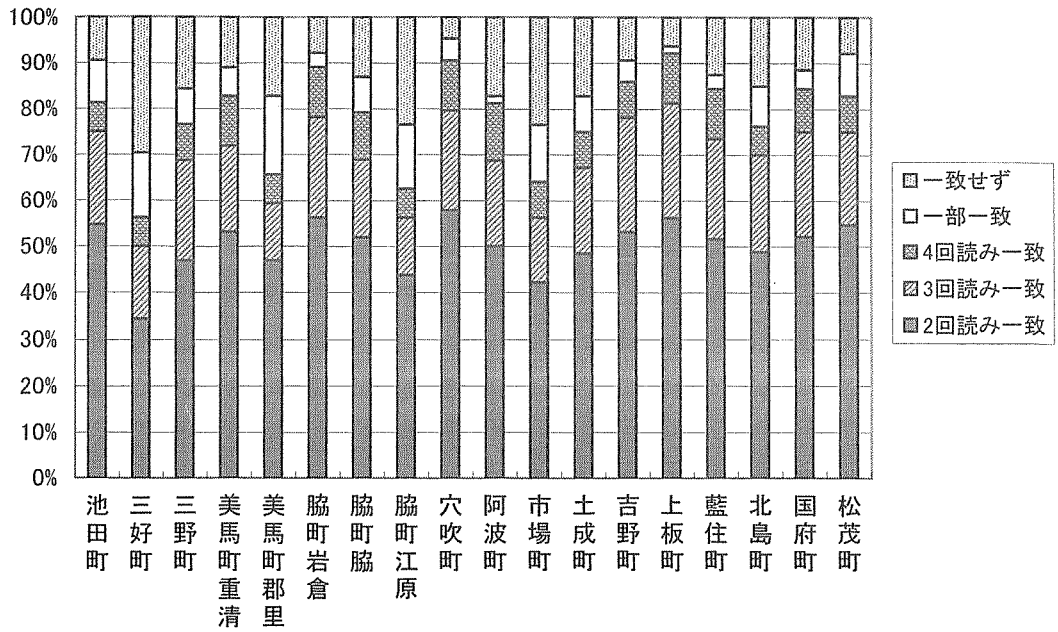
い地域とされていることや森の調査結果を考え合わせると、HLLからLLHへの変化はまず徳島市で起こり、次に県南東部に、そして徳島市以西の地域へと広がっていったと思われる。

（２）アクセントの使用区域とゆれ

HLLアクセントが使われている地域としては、穴吹町から三好町までの地域でも散見されるものの、ある程度まとまった使用が見られるのは阿波町までである。穴吹町から池田町に至る地域においては、いずれの世代も五段活用動詞はHHH、一段活用動詞はLLHで安定している。このことも、松茂町～阿波町と穴吹町～池田町でアクセントの体系が異なることを示唆しているといえる。

動詞単独の読上げと、文の読上げで共通して使用した語については、２回から４回、一人のインフォーマントが同じ語を読んでいる。使用した３拍動詞16語全部（第３類五段活用動詞３語、一段活用動詞１語を含む）について、インフォーマントが使用しているアクセントを比較し、一致率を調べた結果が次の図10である。調査地域全体でみると、多少の差は認められるものの目立った傾向はなく、主にインフォーマント個人の理由による差であって、地域的な理由による差ではないと思われる。しかし松茂町から阿波町の地区をみると、名詞の場合にはほとんどゆれがなかったのに比べると一致率の低さが目立つ。第２類の語が変化中であることの影響があるのかもしれないが、動詞は名詞に比べ活用があり

図10　動詞のゆれ



複雑な体系をもつこと、文で読み上げた場合は必ず前接語を持ち、単語単独の読み上げの場合とで環境の違いが生じることなども影響していることも考えられる。この結果からは、動詞は名詞に比べアクセントがゆれる要素をもっている、と言えそうである。

3.　まとめ

吉野川流域のアクセントについての調査結果を、地域的、世代別の観点から整理し、その現状と、そこに見える変化について見てきた。現状をまとめると、方言としての地域の特徴は老年層に見られ、中年層は地域の特徴を保持しつつも老年層とは多かれ少なかれ異なるアクセントを使い、若年層は方言的な部分も見られるが大阪や東京の影響が色濃く見られるといえる。このことは、この地域に限ったことではなく、全国的に見られる日本の現状でもある。その現状をもたらした変化をみると、森重幸氏の３拍動詞第２類の調査結果から、1958年頃は接触による変化では物理的な距離が大きな要因であったことがうかがえるが、今回の調査結果からは、若年層においては、距離をあまり感じさせない変化も見られる。この数十年におけるマスメディアの発達によって、情報が一瞬にして全国に伝わるようになり、また、交通機関の発達によって人の移動も短時間で簡単にできるようになって、情報伝達における地域性が薄れてきた結果が形となって表れたといえるだろう。全国の情報が大量に簡単に手に入るということは、変化の原因がそれだけ多く提供されていることに他ならない。今回の調査でも一部の若年層に、東京から遠く離れたところに住み、外住歴がなくても東京の影響を強く受けるという新しい変化と思しき傾向が見られたが、時を経て再度調査をすれば、地域の差がもっと薄くなった結果が得られるのであろうと思われる。

（以上執筆：武田）

3. アクセントの標準語化

1. 調査の概要と目的

総語数347語を対象にした項目には、１・２・３拍名詞、２・３拍動詞の活用形が含まれる。本稿では、まず、２節でアクセントの標準語化プロセスをより包括的に捉えるために採用した情報処理論的なアクセントの定義付けを行い、また本稿が対象とする類別語彙についても情報所理論上における意義付けを行う。次に３節では、２・３拍名詞の動態に焦点を絞り、４節では、２拍名詞第３類と２拍動詞第１類に所属する語彙の型知覚使用意識について言及する。

この３、４節から確認できる東部の徳島市式（京阪中央式）の動向と西部の池田式（讃岐式）、さらには脇町周辺の接触地帯における現況を踏まえ、型知覚項目と一部の発話項目において、特に標準語アクセントが穴吹町から池田町に偏って確認された要因を明らかにすることが考察の中心になる。なお、アクセントにおける標準語化の動向を探る上で、「変化」という観点と「習得」という観点の双方が存在している。本稿においては、情報処理論的な観点を援用しつつ、前者の「変化」の観点から考察を行っている。

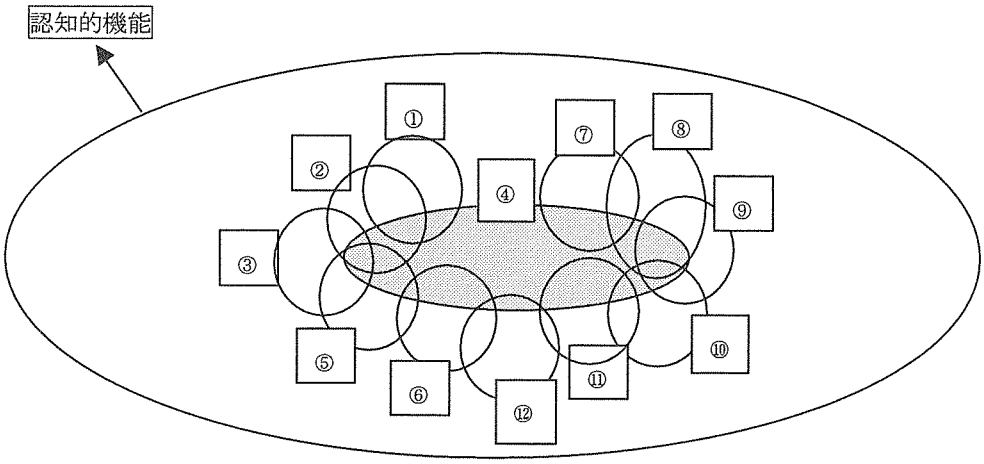
2. 本稿の前提事項

2. 1　アクセントの定義と機能

日本語の韻律層の中における各レベル（モーラ、音節、単語、句、中間節、文）は自律的に存在しているといえる。つまり、単語固有のアクセントは、より上位のレベルにおける句音調や文音調等が被さっても変化しない。単語固有のアクセントにおける本来の機能は、発話時における（文脈に関わらないレベル）で一連の記憶プロセス上において認知的な手掛かりとして働く機能である。つまり、心内辞書に単語に関する長期記憶情報を取り入れる符号化（登録化）段階、それを記憶痕跡として一定期間保持する貯蔵段階、そしてその単語情報を取り出す検索段階における一連の精神活動において、他の言語的な形態、意味的な情報と共に認知的な手掛かりとして働く機能を指す（余2000）。

2．2　類別語彙（純粋な認知的機能）の説明

図11　アクセント機能における構成機能群（仮説、上から見た図）



注）①～⑫は、各二次機能を表わす。

一次機能：認知的機能←カテゴリー化の原理（Principles of categorization）

一次機能に内在化する制約群→AからDの４つの制約が存在。

二次機能：①弁別機能②境界（統合）表示機能③意味カテゴリー機能④類別語彙（純粋な認知的機能）⑤聞こえ度（狭母音と広母音）⑥語種⑦使用頻度⑧語･音節構造⑨語の長さ⑩品詞（特に名詞と動詞）⑪文機能⑫その他

図11は、余（2000）に基づき、情報処理論的観点から捉えたアクセント機能における各構成機能群を示したものである。そして、このアクセント機能の一次機能としては、2．1節で示した単語に関する一連の記憶プロセスにおいて、カテゴリー化の原理に基づき認知的な手掛かりとして働く機能を挙げられる。さらに、このカテゴリー化の原理に基づく一次機能には、内在化する４つの制約群を想定できるが、本稿では説明を割愛する。この一次機能に基づき、①から⑫に示した各二次機能が、相補的にアクセントに関わる情報を、棲み分けながら、情報を共有する部分も持ちつつ並列分散的に機能するものと考える。上述の点は、まだ仮説の域を脱していないが、このように考えることでアクセントの機能について、より包括的に捉えられるものと考えられる。なお、図11は、本稿で扱う類別語彙（④）を中心に想定している。

2．2節の情報処理論的な定義に従うと、本稿で対象となる図11の類別語彙（④）には、「心内辞書内の単語に関する一連の記憶プロセス上（例えば検索時）において認知的な手掛かりとしてより効率的に機能するための語彙群」というような定義を与えられるだろう。しかし現段階では、これを一言で適切に言い表せる用語を思いつかないので、上野（2000）で示されている本来の意味の類別語彙、すなわち「日本語のアクセントの再構には関わる」という意味での類別語彙ではなく、あくまで上述の情報処理論的な観点に基づいて捉えた「類別語彙」として本稿では使用する。用語の変更については今後の課題としたい。

3．発話レベルにおける結果と考察

3．1　徳島市式と池田式の体系的な解釈

議論の出発点として押さえるべき徳島市式と池田式の体系的な特徴については、本稿と同じ調査地域を含み、且つより多数の語彙を用いて体系調査がなされた岸江（2001）の徳島市式、池田式共に「非上昇式と上昇式との対立」であるとする解釈に従う。

なお、本調査における限られた語彙の中においては、１拍から３拍語まで、非上昇式無核型のほぼ全ての語彙と地域において、２モーラ目から３モーラ目にかけて（２モーラ語においては１モーラ目から２モーラ目にかけて）の微妙な下降が、聞き取られた。

以下では、代表して３モーラ以上の語について触れる。佐藤（1985）や中井（1990）、前出の岸江（2001）、山口（2001）で触れられているように、上記の２モーラ目から３モーラ目にかけての微妙な下降をいわゆる下降式として音韻的に認めるには、やはり２モーラ目から３モーラ目にかけて自然下降が認められない音調が、下降調と対立的に存在する必要がある。しかし、当地における先行研究である岸江（2001）、山口（2001）同様、そのような対立を認められなかったので、２モーラ目から３モーラ目にかけての微妙な下降は、あくまで音声的なレベルでの下降調（HH-M、HHM-M、ハイフンは助詞付きを表す）として本稿では捉えている（２モーラ語はH-M）。

上述の点に基づいて、聞き取り時の下降調（H-M、HH-M、HHM-M）は、自然下降有りの非上昇式無核型（H-H、HH-H、HHH-H）として表記している。

3．2　２拍名詞

3．2．1　第１、３類

第１類：竹・箱・梅・国・牛・鳥
第２類：北・蝉・梨・人・雪・歌
第３類：髪・足・犬・年・耳・波・月・網・鬼・鍵・炭・蚤・岸・土・山・坂・塩・家・腕・花・色・竿・糠・綿・肝・熊・垢
第４類：空・父・船・針・息・海・粟
第５類：朝・雨・窓・猿

２拍名詞における調査語（単語単独と文のセット）は、類別語彙（金田一語彙）に基づいた上述の通りである。なお、第３類の語のみ、２回読上げてもらっている（3．4節）。森（1958）や岸江（2001）、山口（2001）等で示されているように吉野川流域の類別語彙上における統合・分化の特徴については、徳島市側の１/２・３/４/５と池田市側の１・３/２/４/５の特徴が確認される。

また、平山（1957）や森（1958）によると、上述した徳島市側の特徴は関西中央部の特徴と同じ京阪式Ｉに属し、池田市側の特徴は地理的に連続する観音寺市等の香川県側のいわゆる讃岐式に共通に確認される特徴で京阪式Ⅳに所属するとされている。

まず、徳島市側の京阪式Ｉ（以下では徳島市式）と池田市側の京阪式Ⅳ（以下では池田式）の違いを浮き彫りにしている第１類と第３類の状況を確認する。まず、第１類において徳島市域の松茂町から阿波町までは、HH-H（「鳥を」、図12）で発話されている。一方、穴吹町より以西の池田市にかけては、大勢としてやはりHH-H型が中心であるものの中老年層において語彙により個人により散発的にではあるがHH-L型も確認された。

次に、第３類の状況においては徳島市域の松茂町から阿波町までは、HL-L（「髪を」、図13）で安定しているのに対し、穴吹町より西の池田町にかけては、HH-Hでほぼ安定している。つまり、既出の報告でも触れられているように、本調査の第１類と第３類においても阿波町より東の第１類（HH-H）と第３類（HL-L）が分化している地域と美馬町郡里より西の両語類ともにHH-Hで統合されている地域、そして接触地帯である穴吹町から脇町岩倉にかけての第１類（HH-H）に対する第３類がHL-LとHH-H間で個人内、個人間ともに揺れている地域が確認される（3．4節）。

ところで、「髪を」（図13）で若年層の女性（３名）、すなわち脇町江原のYKF（イニシャルと性別（MorF）で表記）、美馬町郡里のSKF、三好町のKMFにおいては、標準語アクセント

図12　発話・「鳥を」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								★								★		
84-80	★	★												★	★		★	★
79-75						★	★		★									
74-70				★	★		★			★	★	★		★				
69-65												★	★/★			★		
64-60		★	★	★	★	★		★	★	★							★	
59-55	★					★					★				●	★	★	
54-50																		
49-45			★						◇		★	★	★		★			★
44-40			★	★	★		★							★		★	★	
39-35		★						★		★							★	
34-30	★																	★
29-25			★			★			★							★	★	
24-20	★	○		★	○					★	★	★	★					
19-15							★							★	★			◆
14-10								●										

(凡例)●＝HL-L、★＝HH-H、◆＝HH-L、○＝LH-H、◇＝LH-L
★/★は同世代における個人間の回答状況を示す。

図13　発話「髪を」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								●								●		
84-80	★	★												●	●		●	●
79-75						★	★		★									
74-70				★	★		●			●	●	●		●				
69-65												●	●/●			●		
64-60		★	★	★	★	●		★	★	●							●	
59-55	★					★					●				●	●	●	
54-50																		
49-45			★						★		●	●	●		●			●
44-40			★	★	★		★							●		●	●	
39-35		★						★		●							●	
34-30	★																	●
29-25			★			★			★							●	●	
24-20	★	◇		★	◇					●	●	●	●					
19-15							★							●	●			●
14-10								◇										

(凡例)●＝HL-L、★＝HH-H、◇＝LH-L
●/●は同世代における個人間の回答状況を示す。

（LH-L）が確認される。なお、この３名においてはほぼ全項目にわたって標準語アクセントが確認される。

第３類の調査語においては、徳島市式（HL-L）が語彙（花が・熊が・月が）によっては、池田町までほぼ一貫して確認されることがあっても、その逆に池田式（HH-H）が阿波町より東の地域で確認されることはない。

また、第３類においても、第１類と同様に散発的にではあるがHH-L型が穴吹町から池田町にかけての地域にのみ確認される。なお、脇町における第３類内のHH-L型の報告は、松森（1997）と小野（1998）においても確認される。このHH-Lは、いわゆる下降調のHH-Mとは異なり、２モーラ目から３モーラ目にかけて比較的明確な下げ核を認定できるアクセント型である。詳細については、3．4節を参照。

3．2．2　第２類

次に第２類の北・蝉・梨・人の４語について検討する。この４語については、金田一（1974）、添田（1996）でLH-Lが本来の東京共通語の第２類語の中でも、例外的にLH-Hに発音されているとの指摘がある。この指摘に基づき、当地におけるテレビから受ける標準語アクセントの影響度を測る指標の語彙として北・蝉・梨・人の４語の状況を以下で確認する。

４語の中でも、標準語アクセントの影響度に関しては差が有り、「蝉が・梨を」に関しては全域の全世代でHL-Lが確認され、標準語アクセントの影響は見られない（「雪が・歌を」もほぼ同じ分布）。しかし、「北を・人が」については、標準語アクセント（LH-H）が京阪式の音的フィルターによって置き換えられることで生成されたHH-Hが、穴吹町より西の中・若年層（40代以下）に確認される（図14「北を」）。さらに、図14においては美馬町郡里と三好町の20代の女性において、標準語アクセント（LH-H）が確認された。同様な事例は真田（1996）において、日本語の音がチューク語の音的フィルターによって置き換えられる例として挙げられている。

標準語アクセントの音的代用型であるHH-Hに加えて、標準語アクセント（LH-H）が、穴吹町以西の地域の中若年層に集中して確認された理由については、５節で検討する。

図14　発話「北を」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								●								●		
84-80	●	●												●	●		●	●
79-75						●	●		●									
74-70				●	●		●			●	●	●		●				
69-65												●	●/●			●		
64-60		★	●	●	●	●		●	●	●							●	
59-55	●					●					●				●	●	●	
54-50																		
49-45			●						★		●	●	●		●			●
44-40			★	●	★		●							●		●	●	
39-35		●						●		●							●	
34-30	★																	★
29-25			●			●			★							●	●	
24-20	★	○		★	○					●	●	●	●					
19-15							★							●	●			●
14-10								●										

(凡例)●＝HL-L、★＝HH-H、○＝LH-H
●/●は同世代における個人間の回答状況を示す。

3．2．3　第４、５類

第４類の「空・父・船・針・息・海・粟」に関しては、第１、３類に比較して語彙によって、分布の違いが比較的大きい。まず、「粟を・船を・空が」に関して（図15の「船を」参照）は、中・老年層を中心に、福岡（1998）や山口（2001）において、第３類語においては、報告のある並上がり型（LH-H）が確認された。なお、「船を・空が」に関しては美馬郡郡里以西の池田式地域における中・老年層に並上がり型（LH-H）が多く確認されたのに対し、「粟を」（図16）に関しては、阿波町より東の徳島市式地域における中・老年層に比較的多く確認される。なお、この並上がり型（LH-H）の実相は、MH-Hに近く、京阪中央式のLL-Hに比較して句頭であまり低くなく、大幅な上昇がないといえるアクセント型である。この点については3．3．2節と5節で再検討する。

図15　発話・「船を」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								☆								☆		
84-80	○	○												↓	☆		☆	○
79-75						○	☆		○									
74-70				○	○		☆			↓	○	↓		↓				
69-65												☆	↓/↓			☆		
64-60		◇	★	○	○	○		○	☆	☆							☆	
59-55	○					☆					○				☆	☆	☆	
54-50																		
49-45			↓						↓		○	☆	↓		○			☆
44-40			○	○	☆		☆							○		☆	↓	
39-35		○						★		↓							↓	
34-30	★																	○
29-25			↓			↓			↓							↓	↓	
24-20	○	●		☆	●					↓	↓	↓	↓					
19-15							↓							↓	◇			◇
14-10								●										

(凡例)●＝HL-L、★＝HH-H、○＝LH-H、☆＝LL-L、↓＝LL-H、◇＝LH-L
↓/↓は同世代における個人間の回答状況を示す。

図16　発話・「粟を」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								★								☆		
84-80	★	↓												↓	☆		●	☆
79-75						↓	↓,●		↓									
74-70				★	↓		↓			○	○	○		↓				
69-65												●	●/○			☆		
64-60		◇	◇	↓	↓	●		●	↓	↓							●	
59-55	★					●,★					○				●	↓	↓	
54-50																		
49-45			○						○		●	○	○		○			○
44-40			↓	★	↓		↓							↓		↓	↓	
39-35		↓						↓		●							●	
34-30	◇																	◇
29-25			★			★,↓			●							↓	●	
24-20	●	●		★	●					↓	●	●	↓					
19-15							●							↓	◇			◇
14-10								◇										

(凡例)●＝HL-L、★＝HH-H、○＝LH-H、☆＝LL-L、↓＝LL-H、◇＝LH-L
●/○は個人間の回答状況を表し、●,★は個人内の回答状況(揺れ)を表す。

図17　発話・「父が」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								★								☆		
84-80	★	◇												↓	☆		☆	☆
79-75						★	☆		↓									
74-70				☆	★		☆			☆	↓	☆		☆				
69-65												↓	↓/☆			☆		
64-60		★	☆	★	☆	★		☆	☆	☆							☆	
59-55	○					★					☆				☆	☆	★	
54-50																		
49-45			●						●		☆	◇	●		☆			☆
44-40			N	●	●		●							●		◇	●	
39-35		●						★		●							●	
34-30	●																	☆
29-25			●			●			●							●	↓	
24-20	●	◇		●	●					●	●	●	●					
19-15							●							●	●			●
14-10								●										

（凡例）●＝HL-L、★＝HH-H、○＝LH-H、☆＝LL-L、↓＝LL-H、☆＝LL-L、◇＝LH-L
N＝無効回答、↓/☆は同世代における個人間の回答状況を示す。

また、標準語化に関しては、「父が」（図17）において、徳島市式地域、池田式地域共に、40代以下の人の大多数に標準語型（HL-L）が確認される。また「粟を」（図16）に関しては、全地域に渡る20代以下の若年層と国府町から脇町岩倉にかけての中・老年層にも比較的多くの標準語型（HL-L）が確認される。「父が」のような使用される場面のフォーマル度が高い語や「粟を」のような現在では、使用頻度の低いと考えられる語に標準語化がより早く進むといえるのかもしれない。

また、第５類の「雨が・窓を・猿を」においては、森（1958）、上野（1997）、岸江（2001）の先行研究と同様に当該地域である徳島市式域、池田式域の全域の全世代においてほぼLH-Lで安定している状況が窺える。他方、図18の「朝が」においては、松茂町から市場町の全世代においてLH-Lが確認されるものの穴吹町から三好町にかけては、特に40代以上の中・老年層に管見の限りにおいて先行研究で目にしていないLL-Hが確認される。第５類語の調査語は４語と少なく理由はよくわからないが、「朝が」は穴吹町から三好町にかけての中・老年層においては第４類語相当の語であるといえる可能性を示している。

図18　発話・「朝が」

89-85								●								◇		
84-80	◇	↓												◇	◇		◇	◇
79-75						↓	◇		↓									
74-70				↓	↓		◇			↓	◇	↓		◇				
69-65												☆	◇/◇			◇		
64-60		↓	↓	↓	↓	↓		↓	↓	↓							◇	
59-55	↓					↓					○				◇	◇	●	
54-50																		
49-45			↓						↓		◇	◇	◇		◇			◇
44-40			↓	↓	↓		↓							◇		◇	◇	
39-35		↓						★		↓							◇	
34-30	◇																	◇
29-25			◇			↓			◇							◇	◇	
24-20	◇	●		↓	●					◇	◇	◇	◇					
19-15							◇							◇	◇			◇
14-10								●										
	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町

(凡例)●＝HL-L、★＝HH-H、○＝LH-H、☆＝LL-L、↓＝LL-H、☆＝LL-L、◇＝LH-L
◇/◇は同世代における個人間の回答状況を示す。

3．3　3拍名詞

第1類：間・煙・都・魚・氷・着物・形

第6類：狐・雀・鼠・兎・背中

3．3．1　第1類

3拍名詞に関しては、5節の考察に直結する第1類と第6類に所属する語にのみ焦点を当てて検討するが、2拍名詞に比べて同じ類の中でも、アクセントの語彙差が大きい。

まず、第1類の「間が・煙が・都が・魚が」においては、松茂町から池田町までのほぼ全域でHHH-Hが確認される。代表して「煙が」（図19）を示す。3．1節で触れたようにこのHHH-Hの実相は、HHM-Mに近い。しかしこの2モーラ目から3モーラ目にかけての微妙な下降調（HHM-M）は、音韻的な下降式とは解釈せず、2段階表記に基づいたHHH-Hとして取り扱っている。

図19　発話・「煙が」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								◆								★		
84-80	★	★												★	★		★	★
79-75						★	★		★									
74-70				★	★		★			★	★	↑		★				
69-65												★	★/★			★		
64-60		★	★	★	★	★		★	★	★							★	
59-55	★					★					★				★	★	★	
54-50																		
49-45			★						★		★	★	★		★			★
44-40			★	★	★		★							★		★	★	
39-35		★						★		★							★	
34-30	★																	★
29-25			★			★			★							★	★	
24-20	★	★		★	○					★	★	★	★					
19-15							★							★	★			★
14-10								★										

(凡例)★＝HHH-H、↑＝HHH-L、◆＝HHL-L、○＝LHH-H
★/★は同世代における個人間の回答状況を示す。

なお、3．4節で言及している脇町江原の老年層SKMにおいては、２モーラ目から３モーラ目にかけての下降幅が微妙なHHM-Mではなく、明確なアクセント核を想定し得るHHL-Lが、第２類の「毛抜きが」や第３類の「サザエが・小麦が」、第５類の「涙が」に確認される。また、２拍名詞の第１、３類と同様に穴吹町以西の池田町にかけて、３拍名詞においても散発的ではあるが、脇町江原の老年層SKM以外にもHHL-Lを確認することができる。

3．3．2　第６類

次に、第６類において「鼠が・雀が」は、ほぼ同様な分布を示すので、代表して「鼠が」を取り上げる。図20において、穴吹町から西の池田町にかけての全世代にわたって並み上がり型（LHH-H）が確認される一方で、阿波町より東の松茂町にかけては、大和（1993）で指摘のあるLLH-Hを中心に低起式無核の分布が確認される。また、「兎が・狐が」においてはほぼ全域で低起式無核の分布が確認される（「兎が」図21）。

図20　発話・「鼠が」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								○								↓		
84-80	☆	○												↓	☆		↓	☆
79-75						○	☆		○									
74-70				○	○		○			○	○	↓		↓				
69-65												○	↓/↓			↓		
64-60		☆	○	○	○	○		○	○	↓							◆	
59-55	○					○					○				☆	⫽	☆	
54-50																		
49-45			○						○		☆	↓	⫽		☆			☆
44-40			○	○	☆		☆							↓		↓	↓	
39-35		○						☆		○							↓	
34-30	○																	☆
29-25			○			○			☆							↓	☆	
24-20	○	○		○	○					☆	☆	☆	☆					
19-15							☆							☆	☆			↓
14-10								○										

(凡例)◆＝HHL-L、○＝LHH-H、☆＝LLL-L、↓＝LLH-H、⫽＝LLL-H

↓/↓は同世代における個人間の回答状況を示す。

図21　「兎が」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								⫽								↓		
84-80	⫽	⫽												↓	☆		↓	☆
79-75						○	⫽		↓									
74-70				↓	☆		⫽			↓	↓	↓		↓				
69-65												☆	↓/↓			↓		
64-60		↓	⫽	⫽	⫽	⫽		○	↓	↓							↓	
59-55	⫽					⫽					☆				☆	⫽	☆	
54-50																		
49-45			⫽						⫽		⫽	☆	☆		☆			☆
44-40			☆	⫽	⫽		⫽							↓		↓	⫽	
39-35		⫽						⫽		⫽							↓	
34-30	⫽																	↓
29-25			⫽			⫽			⫽							↓	⫽	
24-20	⫽	○		⫽	△					⫽	↓	↓	⫽					
19-15							⫽							↓	⫽			↓
14-10								○										

(凡例)○＝LHH-H、☆＝LLL-L、↓＝LLH-H、⫽＝LLL-H、△＝LHH-L

↓/↓は同世代における個人間の回答状況を示す。

上述の穴吹町から西の池田町にかけて２モーラ目からの並み上がり型は、3．2．3節で触れた２拍名詞第４類語の「船を」（図15）等においても確認された。「鼠が・雀が」に確認される並み上がり型の特徴と併せて、隣接する愛媛県・香川県からの連続性を指摘できるが、以下で具体的に検討する。

また、松森（1997）では脇町脇の老年層の話者において、３拍名詞第６類の語頭の高さがあまり低くないことが指摘されている。この傾向も、特に穴吹町より西の池田町にかけての全世代に渡って広く確認された。従って上述の「鼠が」（図20）のLHH-Hは実際には、MHH-Hに近いし、「兎が」（図21）のLLL-Hも実相はMMM-Hに近い。この点は、讃岐式でも、方言によって上昇式が「句頭であまり低くない・大幅な上昇がない」という特徴をもちながら、それに対立するのが下降式ではなくて、「平進式」（自然下降あり）のものがあるという上野（1986）の指摘に通じるものと考えられよう。

さらに、上述の点を受けて中井（1990）では、讃岐式におけるこのような平進式（本稿では非上昇式）対上昇式のアクセントは、かつては愛媛県新居浜市方言や香川県三野町方言と同じような下降式を有する体系・音調型のアクセントであったと考えられている。そして、その時に上昇式の音調が変化し、低起性や大幅な上昇を失った後で、下降式が平進式に変化したとされている。

5節の考察につながる点として以下のことを踏まえる。それは、２拍名詞第４類語（3．2．3節）と上記で確認した３拍名詞第６類語の「句頭であまり低くない・大幅な上昇がない」特徴は、穴吹町から脇町岩倉の接触地帯と美馬町郡里から池田町にかけての池田式地域により特徴的に確認されるといえる点である。特に前者の「句頭であまり低くない」特徴は、この地域により特徴的に確認されるといえる点で、阿波町から東の徳島市式地域においては、ほぼ確認されない特徴であるといえる点である。また、１拍名詞におけるL-H（「字を」等）、３拍動詞におけるLLH（拾う等）においても同様に、実相はM-H、MMHに近く、「句頭であまり低くない・大幅な上昇がない」特徴が、当該調査語彙の中で、ほぼ一貫して確認された。５節でこの点を踏まえた標準語化プロセスについて考察する。

3．4　２拍名詞・第３類から確認できる接触地帯（穴吹町～脇町岩倉）の特徴

表５は、徳島市式（京阪中央式）が確認される徳島市域と池田式（讃岐式）が確認される池田町域間の地理的に中間地帯にあり、接触アクセントの特徴が色濃い穴吹町から脇町岩倉における２拍名詞・第３類の１、２回目を通じての回答パターン（代表して助詞付きのみを対象、個人毎）を示している。

なお、以下での前提として次の点を踏まえる。図１の阿波町から徳島市内の松茂町まで

は、ｆパターン（１、２回目を通じてHL-Lで発話）で安定しているのに対し、図１に示されている美馬町郡里から池田町にかけては、aパターン（１、２回目を通じてHH-Hで発話）で安定している。美馬町郡里の状況を表中に挙げたのは、接触アクセントの特徴と池田式との連続性・非連続性の特徴を明確にするためである。

表５　２拍名詞･第３類の１、２回目を通じての回答パターン(個人毎)

	穴吹町		穴吹町		穴吹町		穴吹町		脇町江原		脇町江原		脇町江原		脇町江原		脇町脇		脇町脇	
	TKM	78	KNM	62	MOF	49	TIF	25	SKM	89	KKM	61	AKM	38	YKF	10	YKM	78	EGF	70
a(HH-H/HH-H)	17	63.0%	6	22.2%	2	7.4%	7	25.9%	1	3.7%	10	37.0%	16	59.3%	0	0.0%	10	37.0%	2	7.4%
f(HL-L/HL-L)	5	18.5%	8	29.6%	20	74.1%	8	29.6%	6	22.2%	7	25.9%	2	7.4%	3	11.1%	11	40.7%	16	59.3%
b(HH-H/HL-L)	0	0.0%	4	14.8%	3	11.1%	6	22.2%	1	3.7%	1	3.7%	4	14.8%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%
g(HL-L/HH-H)	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	3	11.1%	1	3.7%	3	11.1%	1	3.7%	1	3.7%	1	3.7%	5	18.5%
k(LH-L/LH-L)	2	7.4%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	29.6%	0	0.0%	0	0.0%
m(LH-L/HL-L)	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
d(HHH/HH-L)	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	7	25.9%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%
l(HLL/HH-L)	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	5	18.5%	1	3.7%	2	7.4%	1	3.7%	0	0.0%	3	11.1%
n(LH-L/HH-L)	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	1	3.7%	2	7.4%	1	3.7%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
p(HH-L/HH-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	11.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
q(HH-L/HH-H)	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	1	3.7%	1	3.7%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%
e(HH-H/LL-H)	0	0.0%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
w(LL-H/HH-H)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.7%	0	0.0%
c(HH-H/LH-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%
h(HL-L/LH-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	14.8%	0	0.0%	0	0.0%
その他のパターン	3	11.1%	1	3.7%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	1	3.7%	6	22.2%	1	3.7%	1	3.7%
総計	27	100.0%	27	99.9%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	99.9%	27	100.0%	27	100.0%

	脇町脇		脇町脇		脇町岩倉		脇町岩倉		脇町岩倉		脇町岩倉		美馬町郡里		美馬町郡里		美馬町郡里		美馬町郡里	
	MKF	41	MKM	15	MNM	79	INM	62	ANF	57	MSF	26	YUF	74	CMF	60	STF	43	SKF	23
a(HH-H/HH-H)	16	59.3%	9	33.3%	21	77.8%	9	33.3%	23	85.2%	19	70.4%	18	66.7%	22	81.5%	21	77.8%	0	0.0%
f(HL-L/HL-L)	6	22.2%	7	25.9%	4	14.8%	5	18.5%	3	11.1%	6	22.2%	3	11.1%	3	11.1%	3	11.1%	0	0.0%
b(HH-H/HL-L)	3	11.1%	4	14.8%	1	3.7%	1	3.7%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.4%	2	7.4%
g(HL-L/HH-H)	1	3.7%	4	14.8%	0	0.0%	3	11.1%	0	0.0%	2	7.4%	4	14.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
k(LH-L/LH-L)	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	14	51.9%
m(LH-L/HL-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	29.6%
d(HHH/HH-L)	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
l(HLL/HH-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
n(LH-L/HH-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
p(HH-L/HH-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
q(HH-L/HH-H)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%
e(HH-H/LL-H)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
w(LL-H/HH-H)	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	3	11.1%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
c(HH-H/LH-L)	0	0.0%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%
h(HL-L/LH-L)	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
その他のパターン	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.4%
総計	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%	27	100.0%

(注)　縦軸のa(HH-H/HH-H)を例に挙げると、左が１回目、右が２回目の各読み上げ時に確認されたアクセント型を指す。色付き部は、回答されたアクセント型の拡散性が強い人を表している。又、横軸の地名の下に示す左欄は、イニシャルと性別(MorF)を表し、右欄の数字は年齢を表している。

表６　表１における主な回答パターンの分布

	穴吹～脇町脇にかけて		脇町岩倉～美馬町郡里にかけて	
①回答の拡散性が強い人	6	50.0%	1	12.5%
②a(HH-H/HH-H)が優勢な人	3	25.0%	6	75.0%
③f(HL-L/HL-L)が優勢な人	2	16.7%	0	0.0%
④k(LH-L/LH-L)系が優勢な人	1	8.3%	1	12.5%
総計	１２人	100.0%	8人	100.0%

表５における１、２回目を通じての回答パターンの傾向より、穴吹町から脇町脇にかけての回答パターンの傾向と脇町岩倉から美馬町郡里にかけての回答パターンの傾向が異なることに気付く。この点を表したのが、表６であり、両地域において４つ（①から④）の１、２回目を通じての主な回答パターンが確認された。

まず、穴吹町から脇町脇にかけては、①（回答の拡散性が強い）の回答パターンが半数の人に確認され、この地域の最も特徴的な回答パターンと言えよう。表５における穴吹町のKNM（62歳）の分布状況に基づいて具体的に説明すると、主要な回答パターンの中でaパターン（１、２回目を通じてHH-Hで発話）は22.2%、ｆパターン（１、２回目を通じてHL-Lで発話）は29.6%、ｂパターン（１回目はHH-Hで２回目はHL-Lで発話）は14.8%を示し、ある一つの回答パターンに集中して発話されないバリエーションの豊富な回答パターンを指す。また、この回答パターンは、阿波町より東の徳島市式の地域には全く確認されず、後述する脇町岩倉より西の池田式の地域においてもほぼ確認されない（脇町岩倉のINM１名のみ）ことから、穴吹町から脇町脇の正に接触地帯特有の回答パターンと言えそうである。また、この回答パターンが確認された世代は、表５の色付き部で示される老年層４名と若年層２名においてであり、世代間の断絶を見てとれるが、回答の拡散性という“不安定な状況”が老年層から若年層に“安定した形”で伝承されているとも解釈できる。この地域での中年層を含めた多人数調査が今後の課題となろう。

一方、脇町岩倉から美馬町郡里にかけて最も多く確認される回答パターンは、②のaパターン（１、２回目を通じてHH-Hで発話）で、75.0%を占めている（表６）。なお、穴吹町から脇町脇にかけては、25.0%と比較的少数において確認された。この点において、脇町の中でも、上述の接触地帯特有の回答パターンが多く確認された脇、江原と池田式との連続性が強い岩倉との間に境界線を引くことができるものと考えられよう。

また、表６において③のｆパターン（１、２回目を通じてHL-Lで発話）が優勢な人は、地理的に徳島市式地帯により近い穴吹町から脇町脇にかけて、２名（16.7%）に確認され

たのみで、脇町岩倉から美馬町郡里にかけては、皆無であった。さらに、④のｋ系（１、２回目共に又はどちらか一方を標準語アクセントで発話）の回答パターンは、脇町脇・江原と脇町岩倉・美馬町郡里の両地域共に、１名づつ、若年層の女性に確認された。

以下では脇町江原の老年層（SKM）の回答（１、２回別）を通して、接触地帯に見られるアクセントの特徴をさらに明らかにする。

SKM（脇町江原･老年層）の回答、１回目

HL-L：波が･月を･網が･鬼が･花が･綿を･髪を･土を･垢を･塩を･糠を･山を

HH-H：熊が･坂を･竿を･肝を･年が･炭を･犬が･足を･岸を

HH-L：腕を･色が･鍵を･耳を

LH-L：家を･蚤を

SKM（脇町江原･老年層）の回答、２回目

HL-L：波が･月を･網が･鬼が･花が･綿を･犬が･蚤を

HH-H：熊が･坂を･竿を･垢を･鍵を･土を

HH-L：腕を･色が･耳を･髪を･年が･炭を･肝を･塩を･足を･糠を･岸を･山を･家を

（注）下線部の語彙は、１、２回目を通じて、同じアクセント型で読まれた語彙を指す。

SKMが読み上げた２拍名詞第３類の１、２回目の読み上げを通じて接触地帯の特徴として言えることは、上述したようなアクセント型のバリエーションが他地域に比べ、多く確認されることに加えて、１、２回目の読み上げを通じて同じアクセント型で発話された上述の下線部の語彙が、27語中11語（40.7%）と少ない、すなわちアクセントが揺れている語彙が多く確認されたということである。さらには、穴吹町から池田町の中･老年層に第１類と第３類の語において散発的に確認されたHH-Lが、SKMに特に多く確認された。また、このHH-Lで１、２回共安定して読み上げられた語彙は、わずか２語（腕を･色が）で、浮動性が強く、徳島市式（HL-L）と池田式（HH-H）との直接的な接触により生じた中間型と見なせよう。

4. 型知覚（使用意識）レベルにおける結果と考察

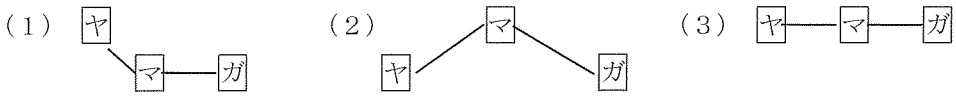
4. 1 調査項目と調査法

アクセント型知覚における調査項目は２拍名詞第３類「山を･髪を･坂を･鍵を･塩を･鬼が」の６語と２拍動詞第１類の「行く･言う･する･着る」の４語の計10語である。この10語を吹き込む際には、DAT（SONY･TCD-８）を用いて無響室で収録した。収録時の読み上げは、大阪市出身の武田による。この際、各モーラをできるだけ一定の高さ･速さ･強さで１語に

付き３パターンの刺激群（アクセント型）を項目毎に各２セットづつ読み上げた。
このようにして出来上がったものをカセット･テープにダビングし、各インフォーマントに聞いてもらった後、普段使用しているアクセント型の使用意識を問うた（図22）。また、耳の不自由な方には、イヤホンを付けてもらった。

図22　課題例

①「ヤマガ」（山が）



なお、聞かせる型知覚項目は、発話項目に比較して個人差が大きくなることが予想された。そのため、実際の調査においては、図22に示すような視覚刺激を補助として使うことで、聞き取り結果に対して信頼性が高まるように配慮した（（１）ではヤが高く、マとガが低いことを示す）。この点は、認知心理学の実験によっても明らかにされている。つまり、ある刺激に対して同じ知覚レベル（聴覚と聴覚）を手掛かりにした場合は、その刺激を捉える上で互いに干渉し妨害するが、異なる知覚レベル（聴覚と視覚）の場合は、互いに妨害せず、むしろその知覚（本稿のアクセント型）を捉える上でより良い結果を得られるよう補助的に機能することが示されている（大島1994）。

4．2　２拍名詞第３類における使用意識と発話状況との関係

図23　型知覚使用意識･「山を」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								◇								●		
84-80	●,★	★												●	●		●	●
79-75						★	★		◇									
74-70				◇	★		◇,★			★	●	●		●				
69-65												●	●/●			●		
64-60		★	★	★	★	★		◇	◇	●							●	
59-55	●					◇					●				●	●	●,◇	
54-50																		
49-45			★						●		●	●	●		●,◇			●
44-40			◇,★	★	◇		◇							●		●	●	
39-35		◇,★						◇		●							●,◇	
34-30	◇,★																	●
29-25			◇,★			●,★			●							●	●	
24-20	◇,★	◇		◇,★	★					●	●	●	●					
19-15							●							●	●			●
14-10								★										

（凡例）●＝HL-L、★＝HH-H、◇＝LH-L
●／●は個人間の回答状況を表し、◇，★は個人間の回答状況（揺れ）を表す。

２拍名詞第３類「山を・髪を・坂を・鍵を・塩を・鬼が」の６語ともにほぼ同様な傾向を示すので、代表して「山を」（図23）を取り上げる。図23において、松茂町から阿波町にかけては、「徳島市式であるHL-Lの使用意識有り」で安定している。一方、穴吹町から脇町脇にかけての接触地帯においては老年層から中年層にかけて、「標準語型であるLH-Lの使用意識有り」の回答が多く確認される。また、この「LH-Lの使用意識有り」の回答は、美馬町郡里から池田町において、40代以下の中・若年層に「LH-LとHH-H間での併用使用意識有り」として確認される。ここで注目される点は標準語型であるLH-Lの使用意識が、穴吹町から脇町脇にかけての接触地帯と脇町岩倉から池田町にかけての池田式地域に集中して確認された点である。

この型知覚使用意識に対応させて、「山を」における発話状況は、3．2．1節で確認した「髪を」（図13）とほぼ同様で図24に示す通りである。すなわち、松茂町から阿波町にかけては、徳島市式のHL-Lで安定し、穴吹町から池田町にかけては、脇町江原、美馬町郡里、三好町の若年層の女性３名を除いて池田式のHH-Hが優勢である。つまり、型知覚使用意識と発話状況の両者においては、標準語化の点で穴吹町から池田町にかけての地域で対応関係になく、前者が後者よりも標準語化が先行している点を指摘できる。

図24　発話・「山を」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								●								●		
84-80	★	★												●	●		●	●
79-75						★	★		★									
74-70				★	●		●			●	●	●		●				
69-65												●	●/●			●		
64-60		★	●	★	★	★,●		●	★	●							●	
59-55	★					★					●				●	●	●	
54-50																		
49-45			★						●		●	●	●		●			●
44-40			★	★	★		★							●		●	●	
39-35		★						★		●							●	
34-30	★																	●
29-25			★			●			★							●	●	
24-20	★	◇		★	◇					●	●	●	●					
19-15							★							●	●			●
14-10								◇										

（凡例）●＝HL-L、★＝HH-H、◇＝LH-L
●/●は個人間の回答状況を表し、★,●は個人内の回答状況（揺れ）を表す。

4．3　２拍動詞第１類における使用意識と発話状況との関係

図25　型知覚使用意識・「行く」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85								○								★		
84-80	○,★	○												★	★		★	★
79-75						★	★		★									
74-70				○	○		★			★	★	★		★				
69-65												●	★/★			★		
64-60		●	★	★	★	★		○	○	★							★	
59-55	○					★					○				★	★	○,★	
54-50																		
49-45			★						★		○,★	★	★		★			★
44-40			○,★	★	○		○							★		★	○	
39-35		○						○		★							★	
34-30	○																	★
29-25			○,●,★			★			○							★	★	
24-20	○	○		●	●,★					★	★	★	★					
19-15							○,★							★	★			○
14-10								★										

(凡例)●＝H-L、★＝H-H、○=L-H
★/★は個人間の回答状況を表し、○,★は個人内の回答状況(揺れ)を表す。

２拍動詞第１類においては「行く・言う・する・着る」の４語において、ほぼ同様な傾向を示すので、代表して「行く」（図25）を取り上げる。図25において、松茂町から、阿波町にかけては徳島式のHHの使用意識が大部分の人に確認されるのに対し、穴吹町から池田町にかけては、全域で広く標準語型であるLHの使用意識が確認される。上記の点は、前節の２拍名詞第３類における使用意識に見られる分布と共通しており、同様に、標準語型のLHの使用意識が、穴吹町から池田町にかけての池田式地域に集中して確認された点に注目される。

この型知覚使用意識に対応させて、「行く」における発話状況は、図26に示す通りである。図26では、２拍名詞第３類（図13、図24）の発話状況と同様、脇町江原、美馬町郡里、三好町の若年層の女性３名を除いて森（1958）で示されているように、全域がほぼHHで安定している点が確認される。つまり、前節の２拍名詞第３類における型知覚使用意識と発話状況間とに確認された非対応関係と同様に、穴吹町から池田町にかけての地域で、標準語化の進行プロセスにおいて、型知覚使用意識が発話状況よりも先行する点が確認されたわけである。

図26　発話・「行く」

	池田町	三好町	三野町	美馬町重清	美馬町郡里	脇町岩倉	脇町脇	脇町江原	穴吹町	阿波町	市場町	土成町	吉野町	上板町	藍住町	北島町	国府町	松茂町
89-85						★		●								★		
84-80	★	★												★	★		★	★
79-75						★	★		★									
74-70				★	★		★			★	★	★		★				
69-65												★	★/★			★		
64-60		★	★	★	★	★		★	★	★							★	
59-55	★					★					★				★	★	★	
54-50																		
49-45			★						★		★	★	★		★			★
44-40			★	★	★		★							★		★	★	
39-35		★						★		★							★	
34-30	★																	★
29-25			★			★			★							★	★	
24-20	★	○		★	○					★	★	★	★					
19-15							★							★	★			★
14-10								○										

(凡例)●＝H-L、★＝H-H、○=L-H
★/★は同世代における個人間の回答状況を示す。

5. 考察

5. 1　アクセントの標準語化に関する考察

穴吹町から脇町脇までの接触地帯と脇町岩倉から池田町までの池田式地域の両地域で、発話レベル（３節）の一部の項目（２拍名詞第２類）において標準語アクセントが集中的に確認された。また、アクセント型使用意識のレベル（４節）においても、同様に両地域で標準語アクセントの使用意識が集中的に確認された。このように、間接的接触下における音声メディアからインプットされる標準語アクセントの質・量は両地域で、ほぼ同様であるはずなのに、標準語アクセントの発話、型知覚使用意識共に穴吹町より西の地域に集中して確認されたのはなぜか。この要因について、以下でまず5. 1. 1節で体系的な観点から、次に5. 1. 2節で類別語彙の単位から情報処理論的な観点を援用しつつ考察を加える。

5．1．1　体系的なレベルにおける要因分析

まず、体系的なレベルにおける要因について分析する。すなわち、3．2．3節と3．3．2節で述べたように、愛媛県・香川県側から連続する上昇式における「句頭であまり低くない・大幅な上昇がない」特徴（上野1986、中井1990、佐藤1996）が、標準語アクセントの発話、型知覚使用意識ともに穴吹町より西の地域に集中して確認された大きな要因であると考える。特に、前者の「句頭であまり低くない特徴」が穴吹町以西の池田町にかけての地域により強く確認されるが、これはすなわち、音韻論的・情報処理論的両観点において上昇式（MMM-H）と非上昇式（HHH-H）間の区別がつきにくくなることを意味しよう。
さらに言い換えると図11（2．2節）におけるアクセントの認知的機能レベルで、上述の体系の区別（上昇式対非上昇式）が曖昧なため、発話時に心内辞書（2．1節）内の単語を検索する際に、アクセントが効果的に機能していないと想定できる地域から、音韻論的な特徴（核の有無と位置）が明確で、心内辞書内の認知的機能レベル、すなわち単語の登録・貯蔵・検索段階においてより効果的に機能し得る東京式アクセントを取り入れる傾向が強いと想定するのである。

なお、3．4節で触れたように、穴吹町から脇町脇にかけての地域では、アクセントの発話において回答が拡散するという接触地帯特有の傾向が確認されており、この１回目と２回目の発話において一つの回答パターンに集約されないという不安定要因も情報処理論的に安定した標準語アクセントを音声メディアから積極的に取り入れる要因の一つになっているものと考えられる。上述の点に基づき、発話レベルにおける２拍名詞第２類の語や型知覚使用意識レベルにおける２拍名詞第３類や２拍動詞第１類の語において、穴吹町以西の地域にのみ広く、標準語アクセントの発話と使用意識が確認されたものと考える。また、標準語化する際に発話より型知覚使用意識が先行する傾向が強い点については、5．2節で言及する。

5．1．2　類別語彙における要因分析

次に、２拍名詞第２類の発話と２拍名詞第３類の型知覚使用意識に焦点を当て、類別語彙レベルにおける要因について検討する。２拍名詞の第２類においては、標準語アクセントの音的代用型であるHH-Hに加えて、標準語アクセント（LH-H）が、穴吹町以西の地域の中若年層に集中して確認された（3．2．2節）。また、２拍名詞第３類の型知覚使用意識においても、4．2節で述べたように、穴吹町より以西の池田町にかけて標準語アクセント（LH-L）の使用意識が、発話に先行して集中的に確認された。以下での議論の前提として2．2節で踏まえたように「心内辞書内の単語に関する符合化（登録）・貯蔵・検索を行う

際の認知的な手掛かりとしての語彙群」として類別語彙を捉える。この観点に立ち、本稿で比較対照する２拍名詞における類別語彙の分化・統合状況を示したものが、表７から表10である。

なお、今回の調査で型知覚使用意識の内省項目における第４、５類については、調査項目に含まれていなかったので、第１～３類の状況に焦点を当てる。

表７　徳島市式アクセント

類	徳島市式ア
1	HH-H
２・３	HL-L
4	LL-H
5	LH-L

表８　池田式アクセント

類	池田式ア
1・3	HH-H
2	HL-L
4	LL-H
5	LH-L

表９　東京式アクセント

類	東京式ア
1	LH-H
２・３	LH-L
４・５	HL-L

表10　勝山式アクセント

類	勝山式ア
１・４	LH-H
２・３・５	HL-L

注）各Ｌは低い音をＨは高い音を示す。－(ハイフン)は助詞付きの語であることを示す。

徳島市式（表７）と東京式（表９）は、各々所属する語彙のアクセント型は異なるが、第１～３類までの分化・統合状況は、共に１／２・３で対応している。これに対して、池田式（表８）の１・３／２と東京式（表９）の１／２・３は、対応関係にない。つまり、「心内辞書内の単語に関する符号化（登録）・貯蔵・検索を行う際の認知的な手掛かりとしての語彙群」としての類別語彙において、音声メディアからインプットされる標準語（東京式）アクセントの影響を受けやすい語彙群は、東京式と対応関係にない語彙群であるといえよう。つまり、池田式の２拍名詞第２類の発話（3．2．2節）状況然り、２拍名詞第３類の型知覚使用意識（4．2節）における状況然りである。

また上述の点については、福井県勝山市出身で首都圏への移住者（全員18歳）の移住前の状況においても同様な状況を示している　(余1998)。この中で発話レベルにおいて、東京式（表９）においては、第２、３類が統合され、それと同じく統合されている垂井式の勝山式第２、３類（表10）においては、移住前の段階で東京式アクセント（LH-L）が、ほぼ確認されなかった。これに対して、東京式においては、１／４・５で、第１類と第４類が分化しているのに対し、勝山式においては、１・４／５で、第１類と第４類が統合されている。やはり、池田式と同様に類別語彙の分化･統合状況が東京式と対応していない勝

山式の第４類においては、移住前の段階で東京式のHL-Lが多く発話され、且つHL-Lの使用意識も発話に対応して多く確認された。

以上で触れた類別語彙における発話、型知覚意識上の標準語アクセント化についてまとめると、以下に示す通りとなる。

池田式１、３類＞徳島市式１、３類	勝山式第１、４類＞勝山式第２、３類

池田式、徳島式は、異体系間の比較であり、勝山式に関しては同じ体系内での比較でレベルが異なるが、勝山式、池田式共に東京式と対応関係にない、すなわち統合のされ方が異なる類の方がより早く標準語化されやすいといえそうである。

5．2　発話と型知覚が対応しない理由

4．2節や4．3節では、型知覚使用意識の対象項目である２拍名詞第３類や２拍動詞第１類ともに型知覚使用意識が発話に先行して標準語アクセント化することが示された。この点に関して稲垣（1984）では、３・４拍形容詞で、東京式アクセント地帯在住の若年層が新しい型を取り入れる際には、活用形を問わずアクセント型知覚使用意識の方が発話よりも先行し、両者の間にズレが生じることを指摘している。また、田中（2000）の首都圏西部域の高校生を対象にした調査においても外来語アクセント平板化現象のような「流行語的」側面を持つ変化は、「意識型」の受容が「実現型」に先行することが指摘されている。

その一方で、上述の報告とは逆に発話が型知覚使用意識に先行して標準語アクセント化するケースの報告もある。東京式アクセント地帯出身で無アクセント地帯への移住者（若年層）を対象にした堀口（1980）では、移住直後のグループにおいて前出の稲垣（1984）や田中（2000）とは逆の結果が確認される。つまり、そのグループでは東京式アクセント地帯で揺れている新しい語を取り入れる際には、発話能力の方が型知覚能力よりも先行するということである。また、福井県勝山市出身首都圏移住者を対象にした余（1998）でも、２拍名詞の第２・３類における東京方言（LH-L、表９参照）の受容の際には、発話の方がアクセント型知覚使用意識よりも先行するズレが確認される。さらには清水（2001）においても愛媛県東宇和郡の西部地域の若年層において、型知覚使用意識に先行して発話が共通語化することが指摘されている。ここで新しいアクセントを取り入れる際の型知覚と発話間における対応関係を考えてみると、次の３パターンが想定される（余2001a）。

①型知覚、発話共に新しい型を取り入れるパターン

②型知覚が発話よりも先行するパターン

③発話が型知覚よりも先行するパターン

通常のインプット（型知覚）からアウトプット（発話）への情報の伝達経路から考えて、①の対応型の回答が大勢を占めて良いはずである。しかし、上述した報告からは②、③の非対応型パターンも多く確認されている。この点は、型知覚か発話かどちらが先行するにせよ新しいアクセント型を習得する際には、ズレが生じるケースがあるものといえるだろう。当地の穴吹町以西の地域において、標準語化する際には型知覚使用意識が先行し、次いで発話が後を追いかけている②の非対応パターンが確認されたわけである。

6. まとめ

アクセントの標準語化に関わるいくつかの要因の内、穴吹町から池田町にかけての地域では、情報処理論的な観点において、機能性が低い体系的な特徴の曖昧なアクセント体系や類別語彙の統合のされ方が標準語（東京式）アクセントと対応していない語彙群において、標準語化がより早く進む可能性が示された。また、穴吹町から脇町脇にかけての地域では１回目と２回目の回答パターンが、拡散するという不安定要因により、情報処理上、機能性の高い標準語（東京式）アクセントをより早く取り入れる可能性も示された。

一方、型知覚使用意識が、発話よりも先行する点については、新しい体系を取り入れる上でよく確認されるズレを生じるパターンといえ、今後発話においてもアクセントの標準語化が進むことが予想される。

7. 今後の課題

上述したことの検証として、香川県側の讃岐式地域におけるアクセント型使用意識調査の結果においても、脇町周辺の接触地帯や池田式地域と同様な結果が確認される必要がある。つまり、単独回答であれ、伝統的なアクセント型との併用回答であれ、いずれにしても標準語アクセントを使用しているという型使用意識が確認され、発話項目においても同様に部分的にでも標準語アクセントの回答が他の讃岐式地域において、確認される必要がある。

また、本稿ではアクセントが「変化する」という観点から、考察を加えたが、穴吹町から脇町脇までの特に回答パターンが拡散する不安定な傾向が、老年層から若年層にかけて安定した形で伝承されていた。この点を踏まえ、伝統的な特徴を残しつつ、標準語アクセントを受け入れるアクセントを「習得する」観点からも、余（2001ｂ）の情報処理論的な観点を援用して考察を行う予定である。

【付記】

アクセント型知覚のデータ入力作業は、朝日祥之と高木千恵による。また、アクセントの聞き取り結果の入力に際しては、王　嘉暄、李　慶鐘、および王　文齢の協力を得た。ただし、本章でのアクセントの聞き取りは筆者（余）自身が行ったものであり、その考察等の不備はすべて余に帰する。

（以上執筆：余）

【参考文献】

阿部純一他（1999）『人間の言語情報処理　言語理解の認知科学』サイエンス社

石田祐子・岸江信介（2001）「徳島県諸方言アクセントについて」『言語文化研究』8（徳島大学）

稲垣滋子（1984）「アクセントのゆれに関わる要素について」『現代方言学の課題』　明治書院（平山輝男博士古稀記念会編）

上野和昭（1997）『徳島県の言葉』明治書院

上野善道（1985）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（1）」『日本学士院紀要』40-3

上野善道（1986）「下降式アクセント」都立大学方言学会第194回研究発表予稿集

上野善道（1988）「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集』'88

上野善道（2000）「アクセントの比較研究」『音声研究』4-3

大島尚編（1994）『認知科学』　新曜社

小野米一（1998）「徳島県脇町方言の語アクセント」『国語学(現代語研究)報告』4

岸江信介（1997）「大阪市若年層にみられるアクセント変化」『西日本におけるネオ方言の実態に関する調査研究』大阪大学文学部

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究　原理と方法』　塙書房

佐藤栄作（1985）「香川県息吹島方言のアクセント体系を考える」『国語学』140集

佐藤栄作（1986）「香川県高瀬アクセントについて一三野町大見の体言のアクセントから一」『山手国文論攷』7

佐藤栄作（1996）「ゆるやかな下降調の聴き取りと内省について」『言語学林1995-1996』三省堂

真田信治（1996）「チューク語（ミクロネシア）における日本語からの借用語」『言語学林1995-1996』三省堂

真田信治（2000）『脱・標準語の時代』小学館文庫

真田信治（2001）大阪大学新世紀セミナー『関西・ことばの動態』大阪大学出版会

清水誠治（2001）「愛媛県東宇和郡西部におけるアクセントの世代差について」『社会言語科学』3-2

杉藤美代子（1995）『大阪・東京アクセント音声辞典』CD-ROM　丸善

添田建治郎（1996）「日本語アクセント史の諸問題」　武蔵野書院

田中ゆかり（2000）「アクセント型の獲得と消失における「意識型」「実現型」―首都圏西部域若年層における外来語アクセント平板化現象から―」『国語学』203集

中井幸比古（1990）「式の音調に関する二三の問題について」『香川大学教育学部研究報告』

第１部79
中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ（1999）『徳島市方言アクセント小事典―方言アクセント小事典（３）―』神戸市外国語大学
西尾純二・舩木礼子（2001）「徳島・吉野川流域でのダ/ジャ/ヤの消長」『日本語の消滅に瀕した方言に関する調査研究』大阪学院大学
平山輝男（1957）『日本語音調の研究』 明治書院
平山輝男（1960）『全国アクセント辞典』 東京堂出版
福岡啓子（1998）「美馬郡脇町猪尻と阿波郡阿波町との語アクセントの違いについて」『国語学（現代語研究）報告』４
堀口純子（1980）「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」『文芸言語研究　言語編』５
松森晶子（1997）「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』189集
森　重幸（1958）「徳島県のアクセント概観」『神戸大学国文論叢』７号
森田　一（1998）「徳島県美馬郡美馬町の語アクセント」『国語学（現代語研究）報告』４
山口幸洋（2001）「徳島県吉野川流域アクセントの解釈―下降式アクセントは実在するか―」『国語研究』第64号（國學院大學）
大和シゲミ（1993）「低起式語の音声的変種―徳島県阿南市宝田町の場合―」『待兼山論叢』27日本学篇
余　健（1998）「移住先アクセントの受容・統合能力に関わる主要因間の相関性―首都圏への移住者を対象にして―」 日本方言研究会第66回発表予稿集
余　健（2000）「情報処理（記憶）過程におけるアクセントの機能」徳川宗賢先生追悼論文集『20世紀フィールド言語学の軌跡』変異理論研究会
余　健（2001a）「音声的変異」『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社（ダニエル・ロング／中井精一／宮治弘明編）
余　健（2001b）「首都圏移住者の方言アクセント間における切り換え能力の推移―情報処理論的観点から―」第７回社会言語科学会発表予稿集

さなだ　しんじ（文学研究科教授）
たけだ　よしこ（博士後期課程学生）
よ　けん（博士後期課程学生）